
偶然という名の奇跡 6 ～社長令嬢と推理小説～

城ノ内 ジョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然という名の奇跡6 社長令嬢と推理小説

【Nコード】

N7986G

【作者名】

城ノ内 ジョウ

【あらすじ】

夏休みと定期テストが間近に迫った六月のある日。事件は知らないところで起き、知らないところで結末を迎えていたのだが、あるきっかけにより、思わぬ事態を引き起こす。そのきっかけは一冊の推理小説だった。

PHASE・1（前書き）

前作の連載を終了してから約一ヶ月がたったので、そろそろ第六弾を始めたいと思います。

今作はみなさんお待ちかね？な社長令嬢シリーズです。あの人が約二年ぶりに登場します。

成瀬目線とは少し違った感覚をお楽しみください。今回は完全に推理小説です。

前作までと同様、週一でアップします。

PHASE・1

やあどうも。あたし、日向ゆかり。現在存在している企業の八割に何らかの形で関わっている世界有数の大企業日向コンツェルングループの総裁、日向純一郎の一人孫娘だ。

将来世界を牛耳る立場が約束されているあたしは、そこら辺の無能な跡取りたちとは一線を画する。あたしはスーパー美少女お嬢様なのだ。この歳にしてアメリカの大学を卒業しているし、自慢じゃないけどとも十七歳とは思えないようなとんでもない容姿をしている。純情な中学生からロマンスグレーの老紳士まであつという間に魅了させる自信があるね。その気になれば女子だって落とせるだろうと自負している。

とにかく誰もが羨むような地位と頭脳と容姿を持ち合わせているあたしは天下無敵。向かうところ敵なし。だと思っていた。

この歳にして、すでにありとあらゆる幸福を手に入れていて、この先も幸せであり続けると、半ば信じ切っていたあたしだったが、つい半年ほど前、世の中そう簡単にはいかないということを強引に理解させられた。大人が口をそろえて言うように、人生は厳しかったようだ。本当に挫折するかと思ったよ。

まあ昔話はおいといて、どんなにスーパーなあたしでも人並みに苦しんだり悲しんだりするわけ。当然ストレスもたまるし、それを発散させたくもなる。たまには愚痴をこぼしたくもなる。とは言え、家族には愚痴りたくないし、学校の友達はずなからずあたしに憧れている部分がある。絶対に愚痴るわけにはいかない。ではどうするかというと、あたしは行きつけの喫茶店に赴くのだった。

「ふー、やっぱりお姉さんのところが一番落ち着くよ」

あたしはアールグレイを一口含んで、大きく伸びをした。嗚呼、極楽極楽。

「そう言ってくれるのはゆかりちゃんくらいよ」

確かに、周りを見渡してもあまり人がいない。まあ単に流行っていないだけかもしれないけど、それは禁句だ。

「ま、あたしとしては嬉しいよ。人がいないほうが落ち着くしね」
「私は嬉しくないなあ」

そりゃそうだ。

さつきからあたしが誰と話しているかというところ、ここの喫茶店のマスター、小林紫織さんだ。彼女とはかれこれ五年来の仲だ。あたしが中学生になったときに、当時大学生だった小林紫織さんが家庭教師としてうちにやってきたのだ。きつと波長が合ったのだろう、あたしたちは教師と生徒という枠組みを超えて仲良くなり、あたしがアメリカに行っている間もその関係は崩れなかった。

「経営成り立たなくなったら、いつでも言っただけ。あたしがまた家庭教師として雇ってあげるから」

「そうならないことを祈るわ」

大人の余裕を見せ付けるように、お姉さんはさらっと流した。うーむ、あたしとしては半分本気で言ったのだが、参ったねどうも。

「それにしても暇そうだね」

今日は日曜日だ。しかも昼時。よく知らないけど、普通は忙しい時間帯なのではないだろうか。

「いつもこれくらいよ」

「ふーん」

まああたしとしては気兼ねなくのんびりできるからいいんだけど、よく考えてみたらそれってどうなのよ。

「今日はもう店閉めちゃおうかな」

「えー！」

さすがにびつくりしたね。喫茶店って夕方も客来るんじゃないの？

「いいの？」

「いいよ。何か今日はもうくじけちゃった」

「えー……………」

どうなのよ、それ。一応店頼まれてんでしょ。まああたしが口をはさむところじゃないのかもしれないけど。

と、気付けばあたしはまだ紅茶しか頼んでなかった。少しは店の売り上げに貢献しないと！

「あー、そういえばあたしお昼まだだったんだ。何か食べようかな」

あたしが、三文芝居をすると、

「気を遣ってくれなくてもいいよ」

と一瞬で看破されてしまった。

「いやいや、遣うつて。あたしのために閉めてくれるんでしょ？あたしまだ紅茶しか頼んでないし。それに本当に食べたいんだって」
「ふふつ。ありがと」

あたしはサンドイッチを注文して、その間閉店作業を手伝うことにした。それにしても、

「本当に閉めちゃうの？赤字になっちゃうよ」

するとお姉さんは事も無げに、

「大丈夫よ。ちゃんと儲けは出ているから。それに私、結構蓄えあるの」

それは本当の話か？儲けは出てるって？全然信じられないぞ。日曜の昼にこんな状態なんだぞ。

あたしと会話をしている間に、お姉さんはサンドイッチを作り終え、店の入り口にかかっている札を『準備中』に挿げ替えた。

「はい、終わり」

閉店作業を終えたあたしたちは、再びカウンターを挟んで席に着いた。あたしとしてはまだ納得いっていなかったのだが、話し始めるとすぐにおしゃべりモードに切り替えた。

「ゆかりちゃんは推理小説とか読む？」

あたしは注文したサンドイッチにパクつきながら話を聞く。うーん、いきなりだな。

「まあ人並み程度には読むけど」

他人に威張れるほどではないけど、昔はたくさん本を読んだ。ジヤナルを問わず、いろいろ読んだよ。アメリカにいる間は英語の勉強もかねて、原文で読んだりもした。

「そっか！」

お姉さんは嬉しそうに顔を破綻させた。うう……。何か嫌な予感がするな。

「私、今読んでる小説があるんだけど」

そう言って、お姉さんは一冊の本を取り出した。

「すれ違ふ想い」

何だが意味深なタイトルだな。どんな話なんだか想像もつかないぞ。ある意味興味をそそるな。あたしは本を受け取ると、裏表紙を開いた。初版は約一年前。作者は火朽砂系。全く聞いたことないな。第一なんて読むんだ？読みにくい名前にしちゃうと読者に覚えられないぞ。ま、出版先も明記されていないし、きつと自費出版の素人だろう。それにしてもお姉さん、よくこんなものを持っているな。

「最近部屋の掃除をしていたら出てきたんだけど。この本、お客さ

んの忘れ物なの。ちょっと気になって適当に見ていたら、結構真剣になっちゃって、最終的には掃除中断して読んじやった」

あー、よくあるよね。アルバムだったり、小学校の教科書だったり、手紙だったり。最初は懐かしさや珍しさから手に取るんだけど、いつの間にか真剣になっちゃうんだよね。

「それで、その本がどうしたの？貸してくれるの？」

面白いから読んでみて、みたいな話かと思ったら、

「うん。それで私に犯人教えて」
「は？」

思わず間抜けな声が出してしまった。何だって？

「まだ読み終わってないの？」

掃除を中断するほど夢中になったのに。それに犯人教えて、っておかしくない？それってミステリーの醍醐味だよね？

疑問が次々に浮上したが、お姉さんの一言で一気に解消した。

「それ、犯人が書かれてないの。読者に問いかける形で終わっているのよ」

なるほどね。読者に挑戦！みたいなことね。こういった形式のミステリーっ少しだけ流行ったな。本当のミステリー好きにはこういうほうが受ける。今でも未解決事件について、ネット上では熱く議論が展開されているからな。

「つまり、あたしが読んで犯人を推理してくれ、ってことね」
「うん」

うんって……。簡単に言ってくれるなあ。

「一応読んでみるけど、あまり期待しないでね」
「うん。期待して待つてるね」

あー。実にいい笑顔で嫌がらせを……。

「うーん。自信ないなあ。それで、読んでみてどうだった？ 難しかった？」

「解らない。私は、ミステリーってほとんど読んだことなかったから、難しかったけど」

うーん、そっか。まあこんな形で出版するくらいなんだから、解けるような設定にはなっているのだろうけど。お姉さんの頼みだし、一応頑張ってみるか。

こうしてあたしはこの日から探偵役を仰せつかったのだった。

PHASE・1（後書き）

今までどおり感想を随時お待ちしているわけなのですが、一つお願いがあります。

みなさん、第一弾から読んでくださっているようで、とてもありがたい話ではあるのですが、シリーズ通しての感想を最新作に書くのは控えていただきたいと思います。

できれば、作品ごとに感想を書いていただきたいと思います。どんな短い内容でも構いませんので、できるだけお願いしたいと思います。

まだ始まったばかりではありますが、本作もよろしくお願いします。

PHASE・2（前書き）

早速推理要素あります。考えてみて下さい。さほど難しくはないはずですよ。

PHASE・2

あたしは、早速翌日から小説に取り掛かった。気が乗る作業ではなかったし、できるか不安だったけど、一応世話になっている人だったし、お願いされて断る事ができなかった。ま、学校の授業中でも読むことにする。どうせ暇だしね。

内容はお姉さんの言うとおり、面白かった。読み進めていくうちにどんどん引き込まれていくし、最後に一体どのように終わるのか、とても気になった。最後ないんだけど。

とにかく面白かったよ。ただ、最後まで読んでみての率直な感想は全く逆で、端的に、

「売れないな、こりゃ」

たぶん書いたのは素人だろう。文がめちゃくちゃだった。文法や文章構成がなっていない。会話や情景描写が唐突で、脈絡もおかしいし、話に起伏がないのもいただけない。

まあとにかく作文能力がないってことかな。よく言えば、ストーリーが半端なく面白ってこと。逆にちゃんと腕があればかなり売れたかもしれないってことで、どっちにしてもとてももったいないということとは間違いない。

とりあえずここでざっとストーリーを紹介しよう。

舞台は近代アメリカ。全ての人が平等と位置づけられ、みなが幸せになろうと躍起になっていたところだ。個人が個人として尊重されるのはもう少し後になってから。そのころは、家の名前が重要で個人はあまり尊重されない時代。主人公ブレイブもそのしがらみに不満を感じていたうちの一人だった。

ブレイブの家はその地域では有名な大農家の一つ。様々なところに影響のある家柄だった。そのため一人息子のブレイブが成人すると、何とか繋がりを持つとうとした貴族や商人が自らの娘を差し出し、ぜひうちの娘を嫁に、とそれこそ毎日のように、ブレイブの家に縁談を持ちかけてきた。そのころは両親ジョージとアテナも寛大で、農業が順調であったこともあり、縁談が進むことはなかった。

しばらくそんな状態が続き、世間のしがらみに嫌気がさしていたブレイブだったが、ある日、街角で一人の商人の娘に出会った。名をフローラというその女性は最初から自分のことを一人の男として扱ってくれた。縁談であった他の女性とは違い、醜い下心など一切なかった。ブレイブは新鮮さを感じていた。いつしかその新鮮さは恋心に変わっていた。フローラも、家柄を気にせず一人の女性として自分を扱い、そのうえ自らの立場を振りかざさない紳士なブレイブに心を惹かれていた。

いつしか二人はお互いの気持ちに気が付き、ブレイブが婚約指輪を渡すことで、二人はめでたく婚約するに至った。しばらくすると二人の間に娘が誕生し、リーラと名づけた。

二人は順調に幸せを育んだ。両親の意向により、正式な婚姻こそしていなかったものの、二人には関係なかった。二人、いや三人は幸せだった。

しかし、その幸せは突然揺らぎ始める。リーラが生まれてから二

年後、ブレイブの家が傾き始めたのだ。鼻屑にしていた商店が次々に経営破綻。契約相手が激減した。農産物は売れずにあまり、莫大な土地を管理する資金が底を尽きかける。

「ブレイブ、縁談をしろ」

ジョージがこう言い出すのは時間の問題だった。当然ブレイブは断る。しかし、両親は引かない。本格的に家が傾き出すと、ブレイブの気持ちも揺らぎ始めた。

「解った。話だけ、聞くよ」

ブレイブは折れた。フローラに謝り、縁談を始める。もちろん、結婚などするつもりはない。これを発端に少しでも縁ができれば、そういう気持ちだった。しかし、ブレイブの思惑はうまくいかず、親の力で縁談は進む。相手は自分を気に入っているらしい。それに輪をかけるように仕事が忙しくなり、フローラに合う暇がなくなり、少しずつ二人は離れていった。

「私のことは気にしないでいいから。でも、リーラのことは・・・」

ブレイブは目が覚めたような気がした。いつまでも優しいフローラに甘えてどうする。愛娘のことはいつたいどうするのだ。ブレイブは決心した。ある日、家にフローラを招き、両親に紹介した。そして、

「僕はこの人と一緒になる。子供だっているんだ。もう縁談はしない」

ブレイブの言葉は本気だった。縁を切るつもりも合ったかもしれない

ない。その言葉はフローラの心に響いた。

「言うことを聞け。さもなくば勘当だ」

勘当したところで、傾いた家を建て直すことはできない。ブレイブはハッターだと思った。それにこう言われて揺らぐようでは連れてきたフローラに示しがつかない。

「望むところだ」

その日、ブレイブは縁談の相手にもフローラを紹介し、自分に結婚の意志がないことをはっきりと宣言した。その後、一つの小さな家を買ひ、三人で暮らし始めた。そして、婚姻届を作成し、二人は永遠の愛を誓った。

それからしばらく経ったある日、事件は起こった。

フローラは両親に会ってくると言い、リーラの検診をブレイブに任せた。

「迷惑かけてごめんなさい」

突然謝るフローラ。

「何を言っているんだ。僕だってこの子の親だ。今まで何の世話もしていなかったんだ、これからは僕もリーラの世話を見るよ」

ブレイブはむしろ幸せを感じていた。ようやくこの子に父親らしいことをしてあげられる。フローラの言う迷惑は、ブレイブにとっ

て喜びだった。

「リーラをお願いね」

「ああ。任せておいてくれ」

「愛しているわ、あなた」

「ああ。僕もだ。愛しているよ、フローラ」

この会話が二人の、最後の会話になった。ブレーブがリーラを病院に連れて行っているとき、家が火事になった。中からは一つの遺体が発見された。もちろんフローラの遺体である。

「これは殺人だ」

警察が事件の捜査をしている最中、ブレーブはある仮説が頭をよぎった。おそらく自分の両親ジョージとアテナ、もしくは途中まで進んだ縁談の相手、アヴニール。

捜査が進み出火場所が台所であることが判明。そして、出火時刻にフローラは睡眠薬を服用していたことも解った。つまり、外部犯による無差別放火と言うわけではないということ。フローラがターゲットだったわけだ。しかも、フローラに睡眠薬を飲ませたと言うことは、知り合いだったに違いない。ブレーブは自らの仮説に確信を持った。

しばらくすると警察も、複雑な関係に気がつき、そして、ブレーブの予想通りジョージ、アテナ、アヴニールに殺人の容疑が掛けられた。

三人の容疑者の登場により、事件はあっけなく幕を閉じるかと思われたが、捜査は予想外に困難を極めた。

ということ、言われたとおり犯人を推理してみようと思う。出火原因は台所の油。それが長時間火に掛けられていたため、引火し爆発。木造の建物だったため、火は見る見るうちに広がり、全て鎮火したのは燃えるものがなくなったときだったという。予想出火時刻は正午。油が火に掛けられたのはその三十分ほど前。フローラが睡眠薬を服用したのもその時刻だ。

この事件の容疑者はジョージ・アテナ・アヴニールの三人だろう。だが、正直一人に断定できる証拠がない。三人とも家の場所を知っていたかどうか不明だし、その日そのとき、ターゲットであるフローラがそこにいたことを知っていたかどうか不明である。

予想出火時刻には三人ともアリバイがある。しかし、フローラに睡眠薬を飲ませ、油を火にかけておけば、後は勝手にことが進む。加えて、家上がった直後、フローラに睡眠薬を服用させるのは不自然なので、出火時刻より一時間前くらいが重要になってくる。

ジョージ・アテナの両名は出火時刻、知り合いの農家のところにいた。しかし、その前のアリバイはしっかりしておらず、またその農家からフローラの元まで移動時間は三十分ほどということもあり、十分犯行が可能だ。二人一緒に行動していたようだが、家族に証人としての権限はないし、加えてこの二人の場合共犯の可能性がある。

アヴニールは事件当時家にいたと証言しているが、第三者の証人がいないため、十分なアリバイと認められておらず、犯行が可能だと判断されている。

最終的にブレーブはアヴニールと結婚したため、ジョージ・アテナは切迫していた経済状況の建て直しに成功した。この利益があるため、動機は十分だし、アヴニールもブレーブに好意を抱いていたらしい描写があり、その後娘をもうけて幸せに暮らしているらしいので、まあ動機を認めることができるだろう。問題は、最終的なところだけだ。

とりあえず現時点で言えることは誰にでも犯行が可能ということ。事故という可能性は捨てていいだろう。本当に事故だったら、最悪の本だ。面白いとか以前に推理小説としてのモラルが守られていない。何でもありなのはSFやファンタジーだけの特権だ。

ま、流し読みだったし、そんなに集中していたわけでもないの、今のところこの程度の把握で十分だろう。あたしは本を閉じた。

「ご飯食べないの？」

話しかけられて、顔を上げる。そこには去年の冬頃から仲良くなった阪中みゆきがいた。あたしは時計を見た。気が付けば、昼休みになっていた。それも十分ほど時間が経過していた。

「うん、食べるよ」

あたしは適当に返事をして、本をかばんに仕舞い込み、代わりにお弁当を取り出した。

「どうかしたの？何か考え事をしてたみたいけど」
「別に大したことじゃないよ」

本当に大したことじゃないのだが、

「本当に？何か悩んでいるんじゃない？」

よほどあたしが妙なオーラを背負っていたのだろう、みゆきは心配してくれた。出会いが会いだったからな、あたしが何か隠していると思ってしまったようだ。嫌な会合だが、あれで仲良くなったのだから、今となつてはいい思い出である。みゆき以外にもいい出会いがあつたしね。

「本当に大したことじゃないんだけど、」

別に人に話すことではないのだが、まあ隠すことでもないので話すことにした。世間話にしては妙な話だけだね。

「それが、」

「それが？」

「探偵役を任せちゃって」

「・・・・・・は？」

あたしは、疑問符を大量に頭の上に浮かべて、かわいく小首をかしげているみゆきに説明してあげた。

「へえ。それでどうなの？犯人解りそう？」

「いや、まだ始めたばかりでどうにも・・・」

あたしがざつと話し終えたとき、昼休みは残りわずかになっていた。あたしはすっかりお弁当を空にしていたのだが、みゆきはまだ半分以上残している。

「そっか。それっていつまで？」

「期限とか言われてないけど、なるべく早いほうがいい気がする」

そんなに時間かからないと思うけど、あたしは何しろプライドが高い。きつと期限があったら、それより確実に早くお姉さんに言うだろう。だからって妥協はもちろんしないよ。ギブアップだって絶対にしない。あたしは負けるのが何より嫌いなのだ！なぜならあたしはスーパ―美少女お嬢様だからだ！

「私、その喫茶店行ってみたいな。お姉さんにも会ってみたいし」

あたしが自分の中で妙に盛り上がっていたら、みゆきがボソッと一言。うーむ、それは名案だ。

「紹介するよ。今日とかどう？放課後時間ある？」

「大丈夫だよ。でも本のことはどうするの？」

「とりあえずもう少し考えてみるよ。それより、
「ん？何？」

と言ったところで、五時間目の予鈴が校舎内に鳴り響いた。みんなが知ってのとおり、五時間目の予鈴は昼休みの終わりを告げるチャイムでもある。あーあ。

「あー！」

自分の手元を見て、みゆきが小さく声を上げる。話に夢中になるのはいいけど、ちゃんとご飯は食べないと。昼休みは無限じゃないんだよ。というか、しゃべってたの、ほとんどあたしじゃないか。あんたはふんふん言いながら聞いてただけでしょ。

その後、本鈴までの五分間、みゆきは目を白黒させながらご飯を無理矢理口に詰め込んでいた。あたしはみゆきがあたふたしているのを見て、ずっとニヤニヤしていた。この娘はちょっとしたミスが本当にかわいいな。あたしは出会ってから結構な確率で、焦ってあたふたしているところを見ている。そして、あたしはいつもニヤニヤしている。

結局、みゆきは食べ終わる事ができず、五時間目の授業担当の教師に、呆れられていた。

PHASE・3 (前書き)

少し遅れました。

PHASE・3

そして放課後。早速あたしたちは喫茶店に向かった。

「結構遠いんだね」

言われてみるとそうだな。いつもは家から通っていたから、そこまで考えなかったけど、確かに学校から行くと遠いかも。

若干の疲労を感じ始めたとき、ようやく目的地に到着した。

「こんにちは！」

「あら。ゆかりちゃん、いらっしやい」

出迎えてくれたお姉さんはいつものように笑顔だった。

「こ、こんにちは」

人見知りのみゆきは少し緊張している。

「こんにちは。ゆかりちゃんのお友達？」

「うん。クラスメートの阪中みゆき。こっち、小林紫織さん」

あたしがお互いを紹介すると、

「よろしくね。阪中さん」

「はい。よろしく願います」

挨拶もそこにカウンター席に座ると、いつものように紅茶を

注文した。

「それで、犯人解った？」

あちや。いきなりその話ですか。

「まだ一回読んだだけで、犯人探しはこれからなんだ。もうちょっと待つて」

「そっか。うん、解った。慌てなくてもいいよ。ゆっくり考えてね」

とは言っても、あまり長く待たせるのも忍びないし、如何せんお姉さんはとても楽しみに待つている様子だし。今日聞かれるとは思っていたけど、まさかいきなり言われると思わなかったよ。これじやあたしを待つていたのか、小説を待つていたのか解らないよ。

まあいいか。今日はみゆきに紹介するのが目的だったわけだし、適当におしゃべりして帰るとしよう。

「注文決まった？」

あたしは、メニューを眺めて固まっていたみゆきに声をかける。

「うっん、まだ……。私、喫茶店とか入ったことないから、ちょっと迷っちゃって」

この娘はつくづく真面目だな。何でも好きなものを頼めばいいじゃないか。何ならあたしがお金出してあげるから、何でも好きなものを頼んで欲しい。それに、今時こういうちゃんとした喫茶店に入ったことある若者は少ないと思うよ。チェーン展開している店ならいざ知らず。

「日向さんは、いつも何注文しているの？」

「あたしはオリジナル紅茶」

「へー。じゃあ私もそれで」

ということで、二人して紅茶を注文。

「これは昨日と同じやつ？」

するとお姉さんはいつもの笑顔で、

「ううん。全然違うよ」

おー。全然違う、とききましたか。たぶんおいしいとは思っけど、
ちよいと怖いね。

「どういうこと？」

事情を知らないみゆきは当然の疑問を口にする。

「お姉さんは紅茶を調合するのが好きなんだよ」

「ちょ、ちようごう？」

おや、みゆきの顔が若干引きつっている。

「ゆかりちゃん、その言い方やめてよ。イメージ悪いでしょー！」

いやいや、あたしの表現は間違っと思ってないと思うよ。ブレンドなんて言葉じゃ生易しいって。とは言え、一応フォローは入れておくか。

「大丈夫だよ。たぶんおいしいから。一応知識も持っているし、そんな変な味にはなっていないと思うよ」

「そ、そうなんだ」

まあ最初のころはひどかったけどね。家庭教師時代は大変だったよ。知識もないのに、適当に茶葉を混ぜまくって。しかも自分で飲まずにうちに持ってくるんだもん。あたしは完全に毒見要員だったよ。本格的に喫茶店手伝うようになってからはちゃんと勉強し始めたよ。ただ。

「それで、今回はどうなの？出来栄は」

「とってもおいしいわよ」

と言って、お姉さんは出来上がった紅茶をあたしとみゆきの正面に置いた。この場合どう判断したらいいのだろうか。こう言い切るからには、本当においしいのか。はたまた実は味見をしていなくて見栄えでそう言っているのか。嘘をつくような人ではないのだが、意外に人をからかうのが好きな人なんだ。当然味見していると思うけど、あたしには以前の記憶が半ばトラウマのように頭にこびりついている。野心作だった場合、結構危険な香りもする。

「どうしたの？飲まないの？」

みゆきに声をかけられて、あたしは思考の旅から帰還する。

「ああ、うん。飲む、飲むよ」

みゆき、先に飲んでくれ。あたしはあとから逝く。

「でも、あたし猫舌なんだ。みゆきは飲んでていいよ。お姉さん、

ケーキある？」

「そっか。じゃあお先に」

あたしの言葉を一ミリも疑わずに、みゆきはカップに口をつけた。ごめん、みゆき。騙すようなマネをして。だけど、人を簡単に信じるあんたが悪い。ここは世間の厳しさを知るべきだ。心苦しいがあたしは心を鬼にするよ。みゆきのためだもん。安心してくれ、あたしの最期はあたしが見届けてあげる。

あたしは、みゆきのため、という言い訳の常套句的存在を大義名分にして、みゆきに毒見をさせた。みゆきは躊躇うことなく、一口紅茶を含んだ。そして、飲み込んで一言。

「あ、おいしい」

「本当？よかったわ」

お姉さんはいつもの笑顔のまま、普通に返事をした。

「本当においしいの？」

あたしがみゆきに確認を取ると、

「うん、おいしいよ。ケーキに合いそう」

へえ。あたしは匂いを嗅いでみる。うん、いい香りだ。そして、一口含む。

「あ、おいしい」

みゆきと全く同じ反応になってしまった。お姉さんのほうを見る

と、相変わらずの笑顔。その様子はどこか誇らしげだった。むう、やられたな。本当においしいのだが、あたしはどこか納得がいかなかった。なーんだ、普通においしいじゃないか。

あたしはもう一口飲む。うん、やはりうまい。

「日向さん、熱くないの？」

「え？ああ……」

忘れてた。えーつと……。

「あ、あつーい！」

何だか、あからさまに棒読みになってしまったな。ま、いいか。どうせもうバレているだろうし。

「大丈夫？ほら、先にケーキ食べれば？」

いつの間にか目の間に出てきていたケーキを勧めてきた。みゆき、あんたはどこまで純粹なんだ。騙してごめん。

こうしてあたしたちはケーキを食べながら少ししゃべった。その間、ちよくちよく客が来ていたため、お姉さんは終始いたわけではないのだが、仕事がないときは会話に参加してくれた。

「昨日の紅茶は違うお茶葉だったの？」

「うん。あたしは昨日のほうが好きだったんだけど」

「そっか。そつちも飲んでみたいな」

「昨日もあるわよ」

あるのかよ！じゃあそっちを出して欲しかったな。

「お代わりする？」

「はい」

「うん」

お姉さんは手際よく作業をこなし、すぐさま新しいのを出してくれた。

うん。やっぱりあたしはこっちのほうが好きだな。

「あ、こっちもおいしいですね」

「ありがとう。よかつたら持って帰って」

「え？いいんですか？」

えー！そんなのありですか？ずるい！あたしも欲しいよ！っと、そうじゃなくて、

「駄目だよ、お姉さん。ただでさえ赤字経営なんだから」

一応商品なんだから、簡単にあげちゃだめだつて。

「そうなんですか？じゃあ私買います。おいくらですか？」

「いいつて。ゆかりちゃん、余計なこと言わないで。大丈夫だから」

余計つて。あたしは一応心配して言ったんだけど。

「阪中さん、心配しないで。ちゃんと黒字出しているから」

嘘でしょ。現在もあたしたちしかない。みゆきも同じことを感じたように、

「や、やっぱり私、ちゃんと買います。おいくらですか？」

あたりを見渡して、財布を取り出した。

するとお姉さんは呆れたようにため息をつき、

「確かにお客さんはあまり来てないけど、黒字なのは本当よ」

はて？どういうことでしょうか？あたしとみゆきは、頭の上に仲良く疑問符を浮かべた。

「実は父さんたちのところからのお得意様が、毎月うちからコーヒーを買って下さっているの。そういうお客様が何名がいるから、店の売り上げがなくてもやっていけるのよ」

なるほど、合点がいった。

「そのコーヒー、うちが独自にブレンドしたもので、それをとても気に入ってもらって毎月買ってもらっているの」

その手があったか。そりゃ店に来る客の何倍も利益があるよね。

「それに本当に経営困難になったら奥の手を使うから。ゆかりちゃん心配しなくていいの」

はて、奥の手とは？そういえばかなり蓄えがあるとかないとか、この前言っていたな。

「まさか違法な手段が遣っているんじゃない？」
「使ってない！」

そんなに本気になって怒らないでよ。冗談だつてば。

「奥の手って何？バイトとかするの？」

それならうちに来てよ、家庭教師として。相場よりは絶対に出すし、仕事も少ないよ。あたしの話し相手になってくれればそれでいいよ。

「しないよ」

ちょっと期待したあたしだったが、ばつさり否定された。うーん、またしても振られてしまったな。

しかし、本当にどういうことだ？あたしとみゆきはまたしても顔を見合わせた。そんなあたしたちを見て、お姉さんは答えを口にした。

「養育費よ」

「あー・・・・・・・・」

し、しまったあ。どうやら踏み込んではいけないうちに片足を突っ込んでしまったらしい。

「私のお母さん、小さいころに亡くなっているのよ。そのとき、実の父は、私とお母さんを捨てて、どっかの社長令嬢と結婚したの。それで私は、今の父さんたち、実の母の弟夫妻に引き取られたって

わけ」

あー、こりゃ結構ダークは家族関係ですな。相手は社長令嬢か。何となく申し訳ない気分になるのは気のせいだろう。しかし、男つてやつは最低の生き物だな。自分の子供が可愛くないのか？ま、自分の子供つて言っても、自分がお腹を痛めて生むわけじゃないし、その辺は女性と違うよね。どこの物語でも妊娠したつて言うとき、たいてい男は嫌な顔するしな。『生むのか？』つて当たり前だろ！誰のせいで妊娠したと思っているんだ！女だつて一人じゃ子供作れないんだよ、聖母マリアじゃあるまいし。いつだつて社会の中心には女がいるんだよ。女をなめるなよ！女つてだけでお茶くみだと思うな！女は男より努力しないといけないから（納得いかないけど）、同じ地位にいた場合女のほうが優秀なんだよ。ちなみにあたしは結婚したつて、次期総裁の座を譲るつもりはない。たいていの男よりはあたしのほうが優秀だという自信がある。結婚しただけで世界を牛耳れると思ったら大間違いなんだよ。総裁になりたかったらあたしを負かしてみろつてんだ。あたしは女だからつて男に屈服するつもりはないよ。あたしは女である前に日向ゆかりなんだ。スーパー美少女お嬢様なんだよ！

おっと、いけないいけない。個人的な怒りが思わず出てしまった。話を戻すとして、ようやくお姉さんの言っている事が解ってきたぞ。つまり、

「お姉さんは、その養育費に手をつけていないってわけだ」
「そう。だって必要ないもん。世話になりたくないし」

この人も意外に強情だな。いや、芯が通っているというのか。それだけ父親をよく思っていないということだろう。しかし、捨てたり付き返したりしていないってことは、そこに至るほど嫌いつてわ

けじゃないのか？それとも、お姉さんが人間的によくできているってことかな。あたしだったら破産するほど使いまくってやるんだけど。

「じゃあそのお金どうするの？もったいないじゃん」

「んー、確かにね。寄付するとか？月の土地を買うとか」

あー、あくまで自分のために使う気はないんだ。

「とりあえず今は考えてないわ。やっぱり私としては許したくないし、世話になるもの嫌。私の父親は今の父さんだけだから」

確かに。今更父親面されても、って思うよね。

「ま、そっちに関しては何も悩んでいないんだけど・・・」

と言い、お姉さんは顔を曇らせた。何だ何だ？

「あの人以外にもお金が送られてきていて・・・。それが誰からだか解らないのよ」

へえ。その流れだと、親戚からっぽいけど。

「使ってもいいと思うけど、やっぱりちょっと怖いし。金額も普通じゃないっていうか」

ほう。そんなに大変な額なのか。

「いくら？」

「毎月三千円」

あたしは当然聞き間違いだと思った。今、三千元って言った？

「三千万とか三千ドルじゃなくて？」

「うん、三千元。ちよっと前までは二千元だった」

確かにおかしい金額だな。そいつはまるで、

「まるで、子供のお小遣いですね」

今まで黙って聞いていたみゆきがぼそつと呟いた。まさにその通りだ。その金額では一体何の資金か解らないぞ。お姉さんにお小遣いでもあげているつもりか？ちなみに言っておくけど、お姉さんはずっと成人を迎えている大人である。

「目的も用途もよく解らないから、一応取っというてあるんだけど」

と、お姉さんはカウンターの奥に行き、一つの封筒を持ってきた。

「うちのお金と混ざらないように、別にしてあるんだけど」

ふーん、しっかりしているな。じゃなくて、ちよっと待て！

「てことは何？振込みじゃなくて書留で来ているってこと？」

「そうなのよ。だから余計に気持ち悪くって」

書留で送ってきている？なぜだ？お姉さんの父親は振込みなのだ。親類縁者なら、同じように振り込めばいい。そのほうが安全だし、確実だし、スピーディーだ。わざわざ書留にする理由がない。では親類縁者じゃないのか？そうなると、住所を知られていることにな

る。確かに気持ち悪い。もしかしたら見張られているかもしれない。

「それっていつから来ているんですか？」

「ちょうど去年の四月くらいかな」

じゃあ結構最近のことなのか。

「何か心当たりないの？」

「心当たりってどんな？」

うつ。ごもつともな返答だ。どんな状況に陥ったら、こんな事が起こるだろうか。

「人助けをしたとか？」

「月二・三千円書留で送ってくるような人助けって何？」

またしてもごもつともな返答だ。そうだなあ。例えば、

「雪の振る日に傘を貸してあげたとか」

「それは笠地藏でしょ」

「子供たちにいじめられていた亀を助けた」

「それは浦島太郎」

「えー。じゃあ悪者を演じて青鬼と人間を仲良くさせた」

「それは泣いた赤鬼。青鬼が悪者を演じたほうよ」

あちゃあ、初歩的なミスを。

「えっと、じゃあ・・・」

「もう冗談は終わりにして」

あー、怒られてしまった。

「名前とか住所に心当たりはないんですか？」

ああ、その手があったか。でも、そういうのってたいい名前書いてないよね。

「書いてなかったわ」

やっぱりね。

「もういいわ。まだ何も起こってないし、少しでも怪しいと思ったら警察に連絡するから。だからこの話はおしまい」

何か起こってからでは遅いつて。真面目な話、ストーカーという線が一番ありうる気がする。うーん、大丈夫かなあ。お姉さん、今は一人暮らしだし。隣でみゆきも心配そうにしている。警察に連絡すると言つても、連中は実害出るまで動いてくれないし、あまり信用できないような気がする。

「大丈夫よ、きつと。とにかくこの話は終わりだから。それで、二人とも紅茶のおかわりはいかが？」

お姉さんがこんな調子じゃあまりしつこく言ってもしょうがないか。とは言え、完全に放っておくわけにもいかない。……少し考えてみるか。小説のことといい、今回のことといい、何か本格的に探偵みたいになってきてしまったな。まあいいか。とりあえず今は、

「おかわり下さいーい！」

「はい。阪中さんは？」

「はい。いただきます」

「お姉さん、あたしおなか減った」

「そう。じゃあ何か食べる？」

とりあえず今は、この時間を楽しむことにしよう。

PHASE・4（前書き）

推理は休憩。ついにあの男が登場します。

PHASE・4

考えてみよう、とは言ったものの、一体どう考察したらいいのだろうか。お姉さんの周囲の状況を全て把握しているわけじゃないし、お姉さんにも心当たりがないのだ。正直解らないことだらけである。まさか例の注文を請けている人とやらが書留に切り替えたとかじゃないよな。まあお姉さんに限ってそんなミスしないと思う。それに、名前もないって言うていたし。名前や住所を書かないってことは後ろ暗いと事があるってことじゃないか。そう考えると、嫌がらせなのか？しかし、お金を相手に渡すことって嫌がらせになるのか？あたしなら、ありがとう！とばかりに使ってしまうが。

やっぱりストーカーという線で考えるのが妥当だろうと思う。そう考えたほうが何かあったときに一番すばやく動く事ができるし。あたしは警察じゃない。犯人を捕まえるより、お姉さんの安全を第一に考えるべきだろう。とは言え、できることといえば張り込みしかない。これから毎日お姉さんの店に通うとしよう。ストーカーなら絶対にお姉さんの近くにいます。盗撮や盗聴をしている可能性もあるし、とりあえずお姉さんの周りに張り付くことにしよう。連中は総じて独占力が強い。あたしがべったりくっついていれば、きっと何らかのアプローチをかけてくる。そこをふん捕まえてやろう。そしたら気兼ねなくお金を使える。お姉さんが嫌がったらあたしが遣ってやるんだ。それで、お姉さんの店でパーッと使う。楽しみだなあ。

そうと決まれば、早速お姉さんのところに行こう。と、言いたいところだけど、少しは警戒したほうがいいだろう。ストーカーがどんなやつか全く解らないけど、成人男だとちょっと危険だ。誰か男手が欲しいな。横山がベストなんだけど、さすがにばっさり振って

しまった手前お願いしにくい。生徒会長に出世していたし、忙しいかもしれない。とは言え、他にめばしいやつがいるかと言えば、思い浮かばない。

結局放課後になってもいい人材が思い浮かばず、あたしはとぼとぼと目的地向かっていった。校内を練り歩いて誰かを連れて行こうと思ったけど、あまり時間をかけてしまったては本末転倒だ。

一応前進しています、といった感じでゆっくり歩いていると、あたしの目にある風景が飛び込んできた。それは昔懐かしい感じの魚屋。安売りでもしているのか、おば様方が店の前で群れを成していた。その中で一人、あまりにも場違いなやつがいた。おば様方の中に一人、男が混じっていた。しかもそいつは学生服を身にまとい、今まさに下校中だ。加えて、そいつは知り合いだった。何してんだ、こんなところで。

「あんだ、何してんの？」

あたしは思わず話しかけてしまった。するとそいつは自然な動作で振り返り、あたしを確認すると、

「何だ、あんだか」

と、失礼に値するほど何の感情もなさそうな雰囲気でこう言った。ま、こいつはいつもこうだ。あたしは気にせず質問する。

「今日、部活は？」

「部長殿がクラスメートとお出かけになられてな、今日は休みだ」

何敬語使ってんの？嫌味にしか聞こえないぞ。ま、実際嫌味なん

だろうけど。しかし、あの人は自由だね。他の人が帰ろうとすると、首根っこ掴んで無理矢理部室に連れて行くくせに。

「それで、何してんの？」

あたしは話題を戻し、もう一度同じ質問をした。

「見れば解るだろう」

言つと、そいつは目の前にある魚を指差した。

「何この不細工な魚」

「知らないのか？真鯛だ」

マ、マゴチ？聞いたことないよ。何それ？おいしいの？

「カサゴ目コチ亜目コチ科の魚だ。夏が旬の高級魚だ。見てのとおりに、平たい体と突き出た下あごが特徴で、身は歯ごたえのある白身。刺身・洗い・寿司種・煮付けなど、いろいろな料理で食べられる」

そんなこと言われて、どんなアクションをとればいいんだ、あたしは。そんなにいろいろ言われても、あたしは、知らねーよ、としか言えないぞ。

「こんなところでお目にかかれるとは思わなかった。釣ってからまだ二時間しか経ってないらしい。買って帰りたいが、家まで距離がある。これでは家に着くまでに鮮度が落ちてしまう」

真剣な顔をして、何悩んでいるかと思えば、そんなことか。そういえばこいつ、結構料理うまかったな。食べたのは一度だけだった

けど、どれもかなり洗練された味だった。それにしても行動や言動が高校生っぽくないな。こいつは主婦なのだろうか？いや、主夫って言うのか？

おっと、こうしちゃいられない。あたしは急いでいたのだ。時計を見ると、すでに四時を回っていた。

あたしは別れの挨拶をしようと、そいつの顔を見た。そこでようやく思いつく。そういえば店に行く前に一つやる事があったのだ。すでに諦めていたから忘れていた。

「あんた、このあと暇？」
「何で？」

そう聞き返すつてことは暇なんだな。よし、こいつをお姉さんの店に連れて行こう。ケンカになったとき役に立つか解らないが、まあ一応男だ。大丈夫だろう。それに、ケンカ以外なら間違いなく頼りになる。こんな強力なカード、使わない手はない。

「ちょっと付き合つて。成瀬」

「例の三千円の件、伯父さんたちに聞いてみた？」
「うん。やっぱり知らないつて」

店に着き、二人の紹介を終えると、いつものように紅茶を注文し、世間話の感じでさりげなく探りを入れてみたのだが、やはりそう簡単にはいかないか。

「心当たりもなし？」

「うん」

「伯父さんたちは何か言ってた？」

「気にする必要ないって」

進歩はなしか。ま、仕様がないうね。簡単にいくとは思ってなかったし。

ところで、あたしは今とても気に入らない事がある。それは三千万のことじゃない。では一体何かというと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の間にいるお姉さんがいつも以上にニコニコしていることだ。

「何よ」

「べつにつにー」

何やらご機嫌な様子。お姉さんがご機嫌であることは、喜ぶべきことであって決して嫌がることではないのだが、今日に限って言えばちょっと嫌だ。一体何だっていうんだ。別にやましいことなど何一つないというのに、何でこんなに居心地が悪いんだ！えーい、いらいらするな。

「成瀬君、お茶のおかわりどうか？」

「ありがとうございます。いただきます」

一方、成瀬は特に何も感じていない様子。まあこいつは普段から無感動なやつなので、普通と言えるが何かム力つく。何であたしだ

けこんなに恥ずかしいんだよ！あんたも少しはそんな雰囲気出せよ！敬語なんて使いやがって、全然似合わないぞ。まああたしが言えることじゃないけど。

「どうかしたのか？」

あたしの異変に気付いた成瀬が、不意に声をかけてくる。どうかしたのか、じゃないよ。あんたのせいでもあるんだぞ。確かにここに連れて来たのはあたしだけど、何かム力つく。理不尽なのは解っているけど、何かム力つくんだよ！あんたも少しは照れるよ！『べ、別にこいつとはそんな関係じゃないですから！』とか言えよ！全然イメージないけど。そうじゃないとあたしの気がすまないんだよ！

「ところで、何の用だ？」

「はあ？」

成瀬はあたしを放っておいて話を変えた。こいつはあたしに全然興味ないのか？

「何でここに連れてきたんだ？あんたのせいで真鯛を買うことができなかったじゃないか」

まだ言っているのか？マゴチなんか知らないよ。

「どうせ買わなかったでしょ」

「そんなことはない」

「鮮度が落ちるとか言ってたじゃん」

「それは交渉して何とかするつもりだった」

「そんなこと知らないよ」

あー、こいつどうでもいいことばかり言いやがって。

「ねえ。二人はどういう関係なの？」

今度はお姉さんが話しかけてきた。次から次へと忙しいな。少し落ち着く時間が欲しいね。で、何だって？

「ずいぶん仲よさそうだけど。ゆかりちゃんは部活とかやってないよね？ クラスメートとか？ もしかして・・・」

「どっちかって言うと、部活で知り合ったかな」

あたしはお姉さんの話を遮って言った。しかしお姉さん、ずいぶん楽しそうだね。目が糸みたいになっているよ。

「ゆかりちゃん、部活やってたっけ？」

「やってたけど辞めた」

間違いじゃない。ただ、重要な部分を大幅にカットしただけだ。省略ってレベルのカットじゃないけど、もう終わったことで心配させるのは無意味だろう。いずれ話すかもしれないけど、それはまだ今じゃない。昔話つてのは面白おかしくしなければ。

「それで、今日はどうしたの？」

触れて欲しくないことを察してくれたのか、それともあまり興味なかったのか、お姉さんは話題を変えた。正直、そっちもあまり触れて欲しくないんだけど。

「話を聞いていると、成瀬君を道すがら見つけて拉致してきたみたいだけど」

拉致じゃないよ、任意同行。

「いや、あたしにも事情があつて、考えなしにこんなことしているわけじゃなくて」

「その考えを聞こうとしているんだけど」

うーん、ばつさり切られたね。いつものいい笑顔が嫌な感じた。

さて、どうしよう。素直に言おうかな。でもお姉さん、絶対納得してくれないと思うし、反対されると困るんだよな。だからといってうまくはぐらかさないと、きつと怪しまれちゃうし。

「あ、もしかして……」

何かに気が付いたように、お姉さんがポンと手を打った。まさかあたしの思惑がばれてしまったのか？

「もしかして、本のこと？」

「本？」

思わず聞き返してしまった。

「あれ？違ったかな。ほら、私が頼んだ例の推理小説」

あー、あれか。なるほど、その手があったか。いや、決して忘れていたわけじゃないよ。

「そうそう。そのことで成瀬に相談しようかと」

少しわざとらしかったかな？

「やっぱり難しかった？あれ」

むう。そう言われるとちょっと嫌な気分だな。実はもうほとんど解けているんだけど、背に腹は変えられないか。ここは流れに任せよう。嗚呼、あたしのプライドが・・・。

「へえ。それで、成瀬君はそういうの得意なの？」
「得意中の得意」

もちろん、これはあたしのセリフだ。あたしはそう思っている。しかし、得手不得手ってそこに自覚が介在しないと成立しないのではないか。成瀬がそんなこと思っているとは思えないが、今はそんなこと知らん。少なくともあたしはそう思っている。それで十分だ。異論は認めないぞ。

「そうなんだー」

「おい。何の話だ？」

お姉さんの笑顔がいつそう濃くなった直後、成瀬が口を開いた。もう少し黙ってろよ。

「あんたには後で話すよ」

だから少し待っていてくれ。もう少しで誤魔化せそうなんだから。

「今話せ」

むう。空気を読まないやつだな。それとも面倒ごとに巻き込まれることを空気で察したのか？勘のいいやつめ。

「あれ？まだ話してないの？」

あたしと成瀬の会話で、お姉さんが気付く。まずい。成瀬のせいで嘘がばれてしまう。何とか誤魔化さなくては。

「う、うん。本当にさっき会ったばかりでさ、話すタイミングがなかったんだよねー」

これは嘘じゃないぞ。

「そっか」

あたしがどぎまぎしていると、お姉さんはあたしから視線を移動させた。今度は何だ？

「成瀬君。お願いがあります」

「・・・何ですか？」

お姉さんが真剣な表情でこんなことを言う。成瀬は何かを察したようで、すでに迷惑そうな顔をしている。これはひよっとすると、

「ある推理小説を読んで、犯人を捕まえて欲しいの」

「はい？」

やはり、お姉さん自ら成瀬に依頼し始めた。これはラッキーだ。半年前に面倒な事件を持ち込んでしまったあたしでは断られるかもしれないと思っていたのだが、さすがにお姉さんからの依頼は断れまい。

「どういうことですか？」

「実は……………」

と言つて、事情を話し出すお姉さん。成瀬は適当に相づちを入れて一応真面目に聞いている様子。ま、内心どんなことを考えているか解らないけど。たぶんあたしや岩崎さんが頼んだら、最後まで話し終える前にばっさり切つて捨てられる気がする。そう考えると何となく悔しいが今はいいや。

「というわけなんだけど、どうかな？頼まれてくれない？」

話を終えたお姉さんが、少し上目遣いで成瀬に今一度頼んだ。その様子はまるで、たつた今犯しまつた失敗について主に許しを乞うメイドのよう。その憂いを帯びた表情、潤む瞳にはきつとどんな強面だつて数秒持たずに陥落してしまふに違いない。

しかし、敵も然る者。そんな様子で懇願するお姉さんを直視しながら、いまだ表情を崩さずにいる。いや若干、数パーセント困惑が混じっているように見える。きつとあたしの気のせいではないはずだ。

妙に盛り上がっているあたしだったが、不意に成瀬がこちらを向き、少しドキツとした。な、何だよ。そんなににらんだつて、金貨とか吐き出さないぞ。あたしは気圧されないように、成瀬をにらみつけていたのだが、そこでようやく気付く。成瀬はあたしをにらんでいたわけではなかった。そのときの成瀬の目。あたしは見た事があった。感情は読み取れないが、その目はとても深い色をしていた。以前この目をしていたとき、成瀬はすでに何かに気付いているようだった。もしかして、あたしの考えている事が解つたのか？その上でお姉さんの話を聞いていたのか？

全てはあたしの想像だ。全部外れているかもしれない。でもあたしはそんな可能性は一切考えなかった。

「お願い！」

あたしは、成瀬に向かって両手を合わせた。もしかしたらお姉さんの目に、あたしの行動はおかしく見えたかもしれない。滅多に人に物を頼まないあたしが、どうしてこんなことでここまで真剣に頼んでいるのか。でもそんなことは知らないね。あたしにもあたしの事情があるのだ。

そんなあたしの様子を見た成瀬は、再びお姉さんのほうに向き直り、

「解りました。一応引き受けましょう」

「本当？」

お姉さんが歓喜の声を上げるが、成瀬はそれを遮るように、

「ただし、」

と言った。

「俺は明智小五郎じゃありません。その小説を読んでみないことには何とも言えませんが、お手上げという可能性も十分にあります。そのときは許して下さい」

こいつ、本当に自分のこと信じてないな。何か逃げ道を作ることには慣れている気がするぞ。確かにあんたは明智小五郎じゃないかも

しれないが、相手も怪盗二十面相じゃないから大丈夫だって。

「はい。大丈夫です、怒ったりしませんよ」

お姉さんだってこう言っているし。それに、小説に関してははっきり大丈夫だと言っていることができる。すでに目処はついているし、正直あたしだけで解決できるレベルだ。あたしは自分でプライドが高いと自覚している人間だ。これくらいは一人で解決しないと、あたしというアイデンティティーが揺らいでしまう気がする。もし今日中にやれと言われれば今日中にできる。それくらいの気概は持ち合わせている。問題はそっちじゃないのだ。例の現金書留が悪意によるものか解らないが、怪しいのは間違いない。成瀬にはこっちを協力してもらおう。

ここで小説の話は終わり、そのあとはずっと、あたしと成瀬の関係に興味を持ったお姉さんが、質問を続け、それに対してあたしが四苦八苦しながら答えるという、ちょっとつらいイベントが待っていた。

PHASE・5（前書き）

推理と関係あつたりなかったり。成瀬が軽く推測を話してくれていきますので、参考に見て下さい。

PHASE・5

「事情を話せ。できるだけ詳しくな」

すっかり陽は暮れ、暦の上では夏なのだが、正直疑いたくなくってくるほど気温の下がった午後六時。店を出て二人になった帰り道、成瀬が口を開いた。

「どこまで解っているの？」

あたしが鎌を掛けると、

「あんたが俺を呼んだ理由は、小説じゃなくて送り主不明の三千元についてだろ」

「ご名答。やっぱ気付いていたか。このあたしが協力を要請するんだ、これくらいの洞察力がなくては困る。」

「乙女の会話を盗み聞きするなんて最低だね」

「あんたが最初から話してくれたら、こんなことしなくて済んだんだが」

「ごもつとも。」

あたしは足を止めた。それにつられるように、成瀬も足を止める。

「あたしはあのお金の送り主を突き止めたい。力を貸して」

成瀬はしばらく無表情のまま、あたしを正面から見ていたが、

「やれやれ」

そう言うと、ふう、と軽く息を吐き、表情を和らげた。

「あんたはまた俺を厄介ごとに巻き込むのか」

本来ならあたしが謝るところ。成瀬が真剣に言っているなら、あたしは謝っていただろう。そして、もう一度真剣にお願いしていた。しかし、成瀬は優しい表情で薄く笑っている。その様子はまるで、気まぐれな妹のわがままを優しく許す兄のよう。

「何よ。文句あるの？」

あたしは少し落ち着かない気持ちでこう言い返した。子ども扱いすんな。

「大いにあるな。等価交換って知っているか？持ちつ持たれつでもいい」

「うるさいな。今回の件が解決したらまとめて返すよ。利子もつけてね」

本当に嫌なやつだな、こいつは。

「返さなくていいから、もう面倒ごとに巻き込まないでくれ」

「あたしが巻き込まなくても、あんたは別なところで巻き込まれるよ、奇跡的にね」

「嫌な奇跡だな。そもそも俺は奇跡という言葉が嫌いだ」

「そんなの知らないよ。じゃあ運命」

「それも嫌いだ」

「あたしはそういうあんたが嫌いだ」

久しぶりに会話したが、こいつは変わっていなかった。前回と一緒だ。少しは素直に感謝させる。最後の最後であんたが嫌味を言うから、あたしはお礼が言えないじゃないか。もしかしてわざとやっているのか？もしそうだとしたら、あたしはお礼参りしてやるからな。

ふう、疲れるな。こいつと話していると普段かかない汗をかいている気がする。ペースを乱されているような気がする。

「先に決めておこう。何がいい？あたしができる範囲で言うこと聞くよ」

こいつの場合、またなし崩し的にお礼できずに終わってしまう気がする。借りばかり作るのは、あたしの信条じゃない。それに、こいつとは対等に付き合いたい。

「じゃあ真鯛で」

「はあ？」

まだ言ってるのか。そんなに食べたかったのか？それとも一目ぼれでもしたか？

「切り身じゃなくて、一匹尾頭付きでよろしく。なるべく鮮度のいいやつを、うちまで配達してくれ」

「解ったよ。それだけでいいの？」

「あんたは知らないかもしれないが、なかなか手に入らないぞ」

「あたしを誰だと思ってるの？あたしは日向コンツェルンのスーパ―美少女お嬢様なんだから」

忘れたとは言わせないぞ。

「そうだったな」

そう呟くと、成瀬はまた淡く微笑んだ。何だ、こいつは。何で笑うんだ？あたしは面倒ごとを押し付けているんだぞ。嫌じゃないのか？それとも少し話さなかった間に、悟りを啓いて仙人にでもなったのか？

とにかく、そう簡単に微笑まないでもらいたい。あんたの笑顔はあたしの心を不安定にさせる。なぜって？あたしに聞くな。一番不思議に思っているのはあたしだ。

あたしはそんな気持ちを振り払い、かばんに手をつ込んで例の本を取り出した。

「これ、一応あんたに貸しておくから」

お姉さんになんか聞かれたとき、知りません、じゃさすがにまずいからね。

「一応読んどいて」

あたしの言葉に返事をせず、成瀬は本を受け取るとそれを凝視して、

「これ、自費出版か？」

「さあね」

「ふーん」

と興味なさそうな返事をして、かばんにしまった。

「とりあえずどこか入ろう。立ち話じゃつらいくらい長い」

あたしと成瀬は近くのファミリーストランに入ることにした。

ふう、疲れた。これからまたしばらくこいつと顔を合わせなくてはならないらしい。あたしから依頼をした手前、あまり言えたことじゃないが、こりや大変だぞ。いろいろな意味でね。

「そいつは無理だな」

あたしがお姉さんの顔族構成とその影の部分、加えて父親の養育費、送り主不明の三千元について話し終えた直後、成瀬はこう言った。

「いきなり否定しないでよ。やる気なくなる」

「そんなこと知るか。無理なものは無理」

解っているよ。何度も言うなって。でもあたしはお姉さんを安心させたいんだよ。このあたしが、素直に頭を下げたんだから少しは協力しろ！

「なぜ警察がストーカー逮捕に積極的じゃないと思う？それは特定しにくいからだ。盗聴器あるいはストーキング、もしくはそれに似た行動を相手がしていなかったら捕まえるのは絶望的だ。こっちは

相手が解りやすい行動に出るのを待たなければ何もできないんだ」

言われなくても解っているよ。いつ行動起こすか解らない連中に付き合えるほど警察は暇じゃないってことでしょ。だからあたしたちがやるうつて言っているんでしょうが。

「でもストーカーじゃない可能性もあるでしょ」

「どういうことだ？」

「そのままの意味よ。ストーカーの捜査は基本的にあたしがやるから、あんたは別の可能性を考えて」

また迷惑をかけているんだ。今回は前にみたいに危険な目に合わせるわけにはいかない。必要なのは男という記号。男がいると思わせるだけで、実力行使を躊躇うかも知れない。本当にケンカすることになったらあたしが行く。実際あたしのほうが成瀬より強いだろう。

「あんたがやることは三千円の送り主を突き止めることで、ストーカーを捕まえることじゃないってこと」

「なるほど。俺はもっぱら頭脳労働にいそしめ、ということか」

そういうこと。あたしは成瀬の言葉に頷く。

「だから別にゆっくりやっていいよ。試験勉強の合間にでもやってよ。お姉さんの店にはあたしが通って、情報持ってくるから」

「なるほど。俺は完全に受身でいいというわけか。期限もなしで」

「うん」

「そりゃ気楽でいいな。だが、」

成瀬は逆説で言葉を切ると、ポケットから携帯電話を取り出し、

あたしに見せた。

「あ」

そのディスプレイにはよく知る名字が映し出されていた。

「俺にはあまり自由がないらしい」

成瀬の携帯は、電話の呼び出し画面になっていて、その画面には『岩崎』という文字が、十三桁の数字の上に映し出されていた。

「あんた、もしかして門限とか決められてる？岩崎さんに」

「そんなわけないだろう」

「じゃあ帰るコールをするとか」

「一緒に住んでないんだから、不要に決まっている」

そりやそうだ。成瀬の言うことは全面的に正しい。しかし、あの人ならやりかねないと思ってしまふあたり、さすがは岩崎さんと言ったところだろう。

成瀬は大きくため息をつく、やれやれ、といった感じで携帯を折りたたんだ。

「出ないの？」

岩崎さんのことだから、すごく怒ると思うよ。明日きつといういわれるって。

「ここ何日か、一度も電話に出てないから大丈夫だ」

なるほど、常習犯か。それで、一体何が大丈夫なんだ？もう慣れた、としか聞こえないぞ。

しばらくして電話が切れると、成瀬はすぐさま電源を落とした。慣れた手つきだな。

そのまま携帯とかばんにしまうと、今度はさつき渡した本を取り出した。そして、表紙を開く。今読むのか？と思っていると、

「それで、あんたはどう考えている？ ストーカーじゃなかったら一体誰だと思う？」

おいおい。読みながら会議をしようというのか？ さすがに無理な
いか？

「本は急がなくていいよ」

「今日中にできるだけのことはしておきたい。あんただって、あいつを巻き込むのは本意じゃないだらう？」

確かに。これ以上無関係の人を巻き込みたくない。岩崎さんならきつと喜んで手伝ってくれると思うが、やはりそれに甘えるのはよくないと思う。

「あんたの考えを聞かせてくれ」

ばらばらと本を捲り続ける成瀬に向かって、あたしは頷いた。

「ストーカー以外の可能性だっけ？ やっぱりお姉さんの知り合いだ
と思う」

住所を知っているわけだしね。まあ口座番号を知っているのとどっちが近しいか比べると、微妙なところだが、住所しか知らないほうが若干遠い気がするね。だから、父親よりは少し遠い位置にいる親戚じゃないか？

「だが、彼女に思い当たる人物はいなかったんだろ？」

確かにね。でも、

「あの人、結構人の好意に鈍いから」

そういう人いるよね。人からどう見られているか、しっかり把握できていないというか、自分のことをよく解っていないというか。

「つまりあんたは、好意からの三千円だと考えているわけだ」

あたしは、妙な質問に少し驚いた。そこが問題なの？あたしは当然だと思ってたんだけど。

「どういうこと？」

「嫌がらせという可能性もあるだろう」

いや、それはどうだろうか。

「嫌がらせでお金を送るってある？相手を喜ばせちゃうじゃん」

「そうとも限らない。実際彼女は不快感を覚えている」

まあ、そうだけとさあ。それって結果論でしょ？お姉さんが誰かと勘違いして、ありがたく使っちゃったらどうすんのよ。それに、

「嫌がらせならもつと別の手段を使えばいいじゃない。住所知ってるんだから、もつと効果的なことできるでしょ」

「それだと嫌がらせである事が容易に解ってしまう。何が目的か解らないという恐怖もある。それに、警察に連絡もしにくい」

くつ。もつともらしいことばかり言いやがって。あたしの意見を否定するのが目的なのか？

「じゃああなたはこう思っているのよ」

「あなたと大して変わらない」

何だよ、それ！さっきの否定は何の意味があつたんだよ！嫌がらせか？嫌がらせなのか？

「一番可能性が高いのは、おそらく事情を知っている人物。動機は同情か好意だろうな」

自分で言ったことについてはどう思っているんだよ。

「嫌がらせの可能性は？」

「ほぼ皆無だろ。嫌いなやつに金を送る阿呆がどこにいるんだよ」

こ、このヤロー！

「だいたい嫌がらせっていうのは、相手に自分の悪意が伝わらなければ意味も効果もない。嫌がらせかどうか解らない嫌がらせなんて嫌がらせじゃない」

「あんた、あたしにケンカ売ってんだろ！やっぱまた面倒ごとに巻き込んだこと、根に持っているな！あたしのこと嫌いだよ！」

そうと思えん。あたしへの反論を自ら完全に否定しやがって、あたしが無能だと言いたいのか？

「ただの確認だ。そうケンカ腰になるな」

そんな嘘誰が信じるか！まあいい。あたしだってケンカしたいわけじゃない。さっさと話を進めよう。時間がもったいない。

「あんたの言いたいことは解った。要するに援助金みたいなことでしょ」

そこまではあたしも理解できるし、異論はない。だけど、気になることが二つ。

「何でこの金額なの？同情にしても好意にしても、額が小さすぎない？それに四月から金額を上げたのはなぜ？」

月二・三千円ってどれだけ安いんだよ。今時、どれだけ節約しても携帯の料金だってその三倍はいくぞ。それこそ子供の小遣いだ。

「考えられる可能性は三つある」

あたしの問いかけに成瀬が応じる。返答のスピードから言って、すでに考えていたに違いない。

「一つ目。送り主は相当生活に窮していて、この金額が限界だった」

成瀬は続けて指を二本立てる。

「二つ目。送り主はある程度財力はあるが、この金額で十分と考えている」

いい人なのか、そうでないのかよく解らなくなってきたな。

「そして最後。送り主は他者から二千元あるいは三千元を送るよう
に命じられた」

なるほどね。一応妥当な見解のような気がする。今のところ、別
パターンが思い浮かばないから、とりあえず上記三つについて考察
することにしよう。

まず一つ目。これは間違いなくいい人だ。疑問の余地はないだろ
う。そこまでしてお金を送るということは相当近しい人、あるいは
相当お姉さんを大切に思っている人だろう。すると、範囲は限られ
てきそうだな。

そして二つ目。こいつに関しては情報が曖昧だ。

「この金額で十分って、何に対して十分なのかな？」

「例えば彼女に対して犯した罪の程度とか」

つまり送り主はお姉さんに何かしらよくないことをした。その罪
に対する償いがこの現金書留であり、自らが犯した罪から考えて二
千元あるいは三千元が妥当な金額だと考えているというわけか。

「それだとお姉さんに心当たりがありそうだけど」

「彼女は好意に対して鈍いところがあるんだろ？例えば店の物を壊
してしまった。彼女は許してくれたのだが、送り主は納得ができず、
弁償している。これならありえなくはないだろう」

うつ。自分で言ったことだけに否定できない。確かにお姉さんならありうる。きっと直接弁償するといったら、絶対に受け取ってくれないだろう。

じゃあ最後に三つ目。こいつが一番よく解らない。

「成瀬は三つ目についてどんな状況を想定したの？」

「そうだな。例えば上司や親から言われたとか？」

まあないとは言切れないけど。成瀬としても、あまり現実的な状況だと思っていけないらしい。疑問に疑問で答えるなよ。

さて。この三つについてどれが一番妥当だろうか。ここから考察していこうかと思っていると、軽快にページを捲っていた成瀬の指がはたと止まった。どうかしたのか？あたしがいぶかしんでいると、「彼女は名前なんていったっけ？」

「は？」

いきなり何だ。てかさっき教えたばかりだろう。本当に興味ないことは右耳から左耳だな。

「小林紫織だよ」

優しいあたしは再びフルネームで教えてあげたのだが、聞いた成瀬は考え込むように黙ってしまった。何だ、これは。

「両親の名前は？」

今度はそっちか。えっと、何だっけな？あ、そうだ。

「知らない」

考えるまでもなかったな。聞いてないんだから知らないに決まっている。

それより何だ。ずいぶんいきなりな質問だな。その意図するところを教えてくれ。

「何か解ったの？」

「さあな」

言えよ。さあなって否定でも肯定でもないぞ。返事になっていない。

「だが、何か閃いた」

あたしは、おっ？と思った。むう、やるな。あたしはこれから考えようと思っていたのだが。さっぱり解らないが、とりあえず突破口が見えてきたかもしれない。

「つまり、お姉さんの両親の名前が重要なのか？」

「ああ」

なるほど。

「解った。じゃあ今度聞いておくよ」

とは言ったものの、さてどうやって調べよう？まあ、お姉さんに聞くしかないんだけど、聞き方を間違えると怪しまれてしまう。あ

たしが成瀬を巻き込んで、例の現金書留について調べていることを、お姉さんはきつとよく思わないだろう。それほど勘が鋭いイメージはないんだけど、女は総じて勘が鋭い生き物なのだ。慎重にいかないと。それとも、いつそ全部言ってしまうか。思い切り熱っぽく語ったら解ってくれるかもしれない。まあそれはそれで面倒だな。

あたしは結構真剣に計画を立てていたので、全く気がつかなかったのだが、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきまでずっと本から顔を上げなかった成瀬が、わずかに目を見開いて、あたしを見ていた。

「ど、どうかした？」

珍しい成瀬の表情に、あたしは少し驚いてしまった。あたし、何かした？ 気付かぬうちに粗相でもしてしまったのか？ すると成瀬は、

「いや、聞かないのか？」

「何を？」

何やら話がかみ合っていないな。聞くって何を？

「俺がどんなことを閃いたのか、聞かないのか？」

あー、そういうことか。

「聞いたほうがいいの？」

「いや、聞かないでもらいたい」

じゃあ問題ないじゃないか。何を言うんだ。あまり見たことない表情をしていてからびっくりしたじゃないか。

「だが、絶対に聞かれると思った」

確かに聞きたいけど、必要ないんでしょ？それにあんたが言いたくないなら、無理に聞かないよ。

「全部解つたら教えてくれるんでしょ？」

「ああ。もちろんだ」

「じゃあ聞かないよ」

ていうか、あたしにも意地があるんだ。解らないからつてすぐさま人に答えを聞くほど、あたしは自分を過小評価していない。あたしだってきつと解る。むしろ教えてくれるな。自分で正解にたどり着いてみせる。伊達に自分のことをスーパー美少女お嬢様と呼んでないよ。

「うちの部長だったら間違いなくしつこく聞いていた」

「あー、岩崎さんだったらそうしそうだね」

あの人、好奇心旺盛だしね。しかしあんたは口を開けば岩崎さんのことだな。別に気にしないけど、あまり岩崎さんと比べないで欲しいね。全然気にしてないけどね。

と、若干いらつとしたあたしだったが、そんな感情は次の瞬間、全て吹き飛んだ。成瀬がまた淡く微笑んでいた。あたしは思わず息を呑んだ。

「あいつにもあんたくらい配慮があると助かるんだが」

そういう意味深な発言は控えてもらいたいね。あたしもうら若き乙女なんだ。変な事が頭をよぎってしまう。

あたしは思わず成瀬から視線をはずしてしまった。すると、成瀬は開いていた本をパタンと閉じ、一口コーヒーをすすった。

「あんた、今何組だっけ？」

「え？あー、一組だけど」

いきなり世間話を始めやがった。

「結構遠いな。道理であまり会わないわけだ」

何でこんな話をし始めたのか、理解できなかったが、

「成瀬は何組だっけ？」

「五組」

「岩崎さんと同じクラス？」

「ああ。残念なことにな」

とりあえず話を合わせてみた。

「TCCはどう？お客は来てる？」

「最近はないな」

「あー、やっぱり」

「俺としては来ないほうがありがたいから別に構わん。来たら来たでかなり面倒だ」

「あはは……。耳が痛いわ」

「あんたの事件は特に大変だった。何せ最近まで続いていたからな」
「何それ？どういうこと？」
「この前阪中がきっかけでいろいろあつてな」
「それってあたしのせいなの？」
「そうに決まっている」
「すぐく納得いかなんだけど」
「そういえばまだあんたＴＣＣに在籍していることになっているぞ」
「え？そうなの？」
「うちは今部員が五人になっている」
「五人？あたし入れても四人じゃない？」
「最近一人入ったんだ」
「へえ。どんな人？あたし知ってる？」
「ちよつと前に流行った占い研だったやつだ」
「あー、あの女の子？確か一年じゃなかった？」
「そうだ」
「へえ。後輩ができたわけだ」

と、結局何で成瀬が世間話を始めたのか解らなかったが、途中でそんなことを考えるのを止めてしまった。普通に会話を楽しんでいた。

話を終えて店を出たとき、時刻はすでに午後九時を回っていて、辺りは暗闇に包まれていた。

「じゃあ解つたら教えてくれ」
「うん、解った」

とりあえず、成瀬はしばらく参加できないらしい。きっと岩崎さ

んに拘束されてしまっているのだろう。まあ実際本気になれば逃げ出すことも可能だろうけど、成瀬が逃げ出さないのはやはりまんざらでもないってことなのではないのか。

「じゃあまた今度」

成瀬は何の躊躇いもなく、あたしに向かって別れの挨拶をするとき、家のほうに足に向けた。普通は、送っていいこうか？とか言うんじゃないのか？まあ期待していたわけではないからいいけど。

というわけで、あたしたちはここで別れてそれぞれの帰路へ着いた。

PHASE・6 (前書き)

確かに岩崎さんと友達になったら楽しいかもしれません。

PHASE・6

翌日、あたしは久しぶりに学食に来ていた。今日は一人である。先日、しゃべりすぎてお弁当を食べ切れなかったことが尾を引いているらしいみゆきは、すでに教室でお弁当と格闘中だったので、誘わずに来た。ま、たまにはこういう日もあっていいだろう。みゆきには放課後付き合ってもらおうとしよう。今日は結構目的を持っていくので、少し作戦を立ててはいけないな。さすがに成瀬におんぶに抱っこでは格好悪いので、あたしも少しは考えたいし、この昼休みはその時間に当てよう。

と、思っていたのだが、

「あれ？珍しいですね」

誰かに話しかけられた。あたしは首をめぐらせる。するとそこには、

「お久しぶりですね、日向さん」

とてもかわいらしい女子生徒がいた。

「今日は学食ですか？」

「うん。たまにはね」

「そうですか。もしよろしければ、ご一緒してもいいですか？」

丁寧な言葉遣いで尋ねてくる。あたしが無言で頷くと、彼女は隣の席に腰掛けた。しかし、変わった人だね。普通、同学年相手にここまで丁寧な言葉使いしないだろ。そんな言葉使いをしていると、

どこぞのお嬢様に見えなくもない。外見もそんな雰囲気がある。

しかし、何て言うのかね。最近全く会っていなかったにもかかわらず、昨日成瀬に会って、今日は彼女ですか。

あたしの目の前にいるのは、あたしが尊敬できる数少ない人物のうちの一人、そして半年ほど前ほんの数日だけ所属していたお悩み相談委員会通称TCCの長、岩崎さんである。

「お一人ですか？」

「うん。ちよつと考え事したくてね」

「え？もしかして私、邪魔しちゃいましたか？」

おつと、まずいますい。たとえ本当だとしても、そんなこと言っちゃまずいだろ、あたし。それから、そんなに申し訳なさそうな顔しないでくれよ。あたしら、友達だよね？うちの会社の社員だって、そんなに恐縮した態度取らないぞ。

「いやいや！大丈夫だよ、大したことじゃないから。授業中にでも考えるよ」

「そうですか」

そういうと、今にも立ち上がりそうだったのだが、再び腰を落착けて持参してきたお弁当の包みを解いた。ふう。

「そういう岩崎さんは？一人？」

「はい」

「成瀬は？」

「それが行方不明なんですよ。昼休みになった瞬間いなくなってしまっ

何してんのかね、あいつは。まさかあたしのせいじゃないよな？

岩崎さんは一人合掌すると、お弁当を食べ始めた。

「今日の成瀬さん、ちょっとおかしいんですね」

岩崎さんは、思春期になった弟を心配する姉のような雰囲気で口を開いた。

「何か考え事をしているみたいなんですよ。昨日何かあったんですかね？」

それは聞かないでもらいたいね。あたしの口からは何も言えないよ。

「電話にも出てくれませんでしたし。まあそれはここ最近ずっとなんですけど」

やっぱり岩崎さんが構いすぎなんじゃないかと思う。成瀬は猫みたいなやつだから、そういうのに嫌気がさしたんじゃないの？などと若干上から目線だったのがいけなかったのだろう、岩崎さんはこんなことを言い出した。

「まあきつと女性絡みだろうと思うのですが。成瀬さんが私に隠し事をするのは後ろめたいからです。となると、可能性はそこしかありません。まったく、あの天然ナンパローは本当に仕様がないですね。生かしておけません。証拠を確保したら、ただじゃ済ましませんよ。月のない夜は背後に気をつけるよう言っておきましょう」

おいおい、すごい勘だね。全然関係ない理由だけど、なぜか当たってしまっているよ。成瀬、すまない。あんたの犠牲は無駄にしない。安心しろ、あんたの骨はあたしが拾ってやる。って、こりゃもしかしてあたしもやばいのではないか？何か岩崎さん言葉使い悪くなっているし、今思えば相当不吉なこと言っているじゃないか。

しかし、彼女の表情を見れば一発で冗談だと解る。目の前にいる彼女は困り顔をしている。うむ、口ではこんなこと言っているけど、やはり不安なのだろう。いろいろな意味でね。彼女がこんな顔をするのは、成瀬絡みのときだけだろう。そんなことを考えて、あたしは思わず苦笑。

「最近はどう？ＴＣＣの活動は」

あたしは岩崎さんに話を振った。それは追求を避けるためではなく、単純に彼女の話が聞きたかったからだ。

「最近ですか？相変わらずですよ、閑古鳥です。泉さんのところにはちよくちよく相談者が来ていますが、我々に対する依頼はありませんね」

知らない名前が登場したな。昨日成瀬が言っていた元占い研の女の子だろうか。

「泉さんという人が新たに加入したんですが、彼女は占い研だったんですよ。ですから、占い研時代のお客さんが未だに来るんですよ」

「そつえばあの部室荒らしの事件って、岩崎さんたちが解決したんでしょう？やっぱすごいね、ＴＣＣは」

あたしが思い出したように発言すると、

「ご存知でしたか」

と言つて、彼女は苦笑い。あれ？あたし変なこと言ったかな？

「まあ確かに我々が解決したと言えばそうなのですが、」

岩崎さんは言葉を濁している。どういふことかといぶかしんでい
ると、

「ほとんど成瀬さんが一人で解決しまして」

なるほど、そういうことが。

「成瀬さんは否定しますが、あの事件を解決する事ができたのは間違
いなく成瀬さんのお力なのです」

成瀬もそうだが、岩崎さんとても優秀な人だ。将来あたしの秘
書になつてもらいたいくらい。だからだろう。自分の手柄と考えて
いない名誉を受け取りたくなかった。あたしはそう考えたのだが、

「ですからあまり、TCCが解決、みたいにするのは気が引けまし
て。日向さんのときのように新聞を発行するのは控えました。まあ
それに関しては別の理由もあつたのですが」

だが、あたしの思惑は外れた。

「成瀬さんはもっと自分の手柄を自慢してもいいと思うんです。謙

遜しているわけじゃなく、本気で自分は何もしていないと言っているのですから、なおさらです。きっと性格なのでしょう、自分をアピールするのが苦手なんですね。それはある意味成瀬さんらしいと言えるのかもしれませんが、そのせいで本来いるべき地位にいけないように、私は感じてしまいます」

岩崎さんは成瀬を尊敬しているのだ。心から成瀬の実力を認めているのだ。しかし、周囲の人間はそれに気付いていない。成瀬本人もそれをアピールしようとしないう。その辺りに不満を持っている。岩崎さんが成瀬の性格についていろいろ文句を言うのは、そういういた気持ちが原因みたいだ。本当に素直じゃないなあ、この人は。

「何笑っているんですか？」

「え？」

どうやらあたしは無意識的に微笑んでいたようだ。いやいや、決しておかしくなかったわけじゃないぞ。何かに頑張っている人、一生懸命になっっている人を見ると応援したくなるよね。温かい気持ちになるよね。

「成瀬は今くらいがちょうどいいんじゃない？あいつがお金や地位を欲しがり始めたら、岩崎さん大変だと思うよ」

「確かにそうですね・・・」

彼女は箸を止めて、低くうなづいた。

あたしが思うに、彼女は確かに優秀なのだが、加えて努力家なのだ。おそらく成瀬の隣ににいるにふさわしい女性になるために、かなりの努力をしていると思う。成瀬が上を目指したら、今以上の努力が必要になるだろう。しかし、それを苦に思う彼女ではなかったよ

うだ。

「確かに私は今以上に大変になるかもしれませんが、でも現状に満足されるよりは上を目指してもらったほうが嬉しいです。私はもっと頑張ればいいだけです。努力することは好きですよ」

さすがだ。どうやらあたしはまだ十分に彼女を認識できていなかったらしい。これでもかなりの洞察力があると思っていたのだが、彼女のほうが一枚も二枚も上手だったようだ。しかし、そんな彼女にも弱点があることをあたしは知っている。

「そうになったら周りが放っておかないと思うよ？」
「む」

言葉のニュアンスから、あたしが何を言いたいのか理解してくれた様子。周りっというのはもちろん女子も含める。

「うーん・・・」

考えていなかったのか、かなり深刻な様子になっている。彼女は努力家だから、きつとそういった面でもいろいろ努力しているはずなのだが、如何せん相手が相手だ。その努力の方向があっているのか、全く自信がない様子。確かにね。あいつ、女子に興味あるのかさえも疑わしいし。

「きつと大丈夫だよ。岩崎さんは十分かわいいから」
「え？な、何ですか！いきなり」

動揺している。面白いね。きつと他の面で褒めたら、すかさず謙遜の言葉が返ってくると思うのだが、こういう攻めにも弱いらしい。

言われ慣れてないのか？岩崎さんくらいの容姿なら、よく言われている気がするんだけど。

からかうのは止めておこう。何か全て本気にしそうだし、知恵熱でも出されたら困る。

そのあとは、また世間話になった。岩崎さんはあたしより物知りで、知識の幅も広いので、普通の会話でも本当に面白い。彼女と会話を楽しむには昼休みは短すぎる。ま、満足いくまで話すには、何時間あっても足りないだろう。今日はこのくらいで十分だ。

「さて、そろそろ行きますか」

「そうですね」

「ありがと。岩崎さんが来てくれたおかげで、楽しい昼食になったよ」

「いえ！私のほうこそ楽しかったです。貴重な時間をお邪魔してしまったみたいで、本当に恐縮です」

それに関して謝るのはあたしのほうだって。

「岩崎さんとはまた話したいな」

「私もです。いつでも部室に来て下さい。日向さんならいつでも歓迎しますよ」

「うん。また行くよ」

教室に戻ると、あたしは一息ついた。ふう。何か癒されたね。何となく課題に追われる大学生のような生活をしていたから、精神的

に参っていたのかもしれない。あの人とはこれからも付き合っていたいな。

「何笑ってんの？」

さつき岩崎さんに言われたセリフを、今度はみゆきに言われた。またしても気付かないうちに頬が緩んでいたらしい。いかんいかん。

「みゆき、今日暇？」

「うん。どこか行くの？」

「あたし、今日お姉さんのところに行こうと思ってるんだけど、一緒に行かない？」

「うん、いいよ。私も行きたい」

こうして今日の予定が決まった。さて、もう少しだけ頑張ってみますかね。

PHASE・7

今日のお姉さんは実に不機嫌だった。ずっと口をへの字にしてい
て、むつつりしていた。ただお客さんに話しかけられたときだけ、
若干笑顔になり、話が終わると再びむつつり顔。そして、そんな日
に限って今日は客がたくさん来ていた。あたしが話題を触れるよう
になったとき、すでに五時を回っていた。

「ようやく落ち着いてきたね」

「そうね」

やっぱりいつもより口数少ない。

「それで、何で今日はそんなに不機嫌なの？」

あたしの質問に、お姉さんは驚いたように目を見開き、直後表情
を緩めてにため息をついた。

「やっぱり解った？顔暗かった？」

「ずっとむつつりしていたよ」

「そっか。喫茶店の店員失格ね」

自嘲的に笑うその表情はどこか疲れているように見えた。

「何かあったんですか？」

みゆきが心配そうに尋ねると、

「うん。ちょうどこの前の話の続きになるんだけど」

「この前ってストーカーの方？」

思わずあたしは前のめりになってしまった。

「ストーカーって・・・ああ、送り主不明の三千円のことね。そっちじゃなくて」

ああよかった。もうすでに被害が出てしまったのかと思った。それで、

「そっちじゃなくてっていうと？」

「私の父親の話」

なるほど、確かに機嫌が悪くなりそうだ。しかし、あたしとしては好都合。何せ情報を聞きださなくてはならないからな。

「それで、お父様がどうかしたんですか？」

「うん。昨日電話かけてきてね。そろそろ会わないか？って」

おや？とあたしは思う。

「それってよくある話なんじゃないの？」

養育費をきちんと送ってきているということは、やはり父親はお姉さんのことを憎からず思っているということ。そうなれば会いたいののは普通だろう。お姉さんは今二十三歳だ。これまで幾度となくそんな話があってもおかしくはない。加えて、そんなことでお姉さんは悩んでいるのか？この前の話を聞く限り、ばっさり切り捨てていると思ったのだが。

「うん。ちょっと前まではよく合っただけ、私が断り続けたから、最近は来なくなっていたんだ」

おお、さすがだ。しかし、復活したのか。ふむ、確かにちょっと気にはなるな。でもそこまで悩む理由は他にありそうだな。

「内容は以前と同じなんですか？」

「ううん。今度は娘が会いたいて言っているって言われて・・・」

本当の理由はこっちか。実父の娘ってことはお姉さんにとって、腹違いの妹ってことになるな。

「本当は嫌なの。でも小春ちゃんに罪はないから・・・。でもあの男が口から出任せを言っているかもしれないし」

確かにお姉さんの言うことをもつともだ。とにかく迷っているのだろう。怒りの矛先を間違えてしまうと、ただの八つ当たりになってしまう。それが年下の女の子（名前は小春というらしい）ならなおさら考えものだ。

「何て返事したんですか？」

「とりあえず断っておいたわ」

「伯父さんたちには相談した？」

あたしの言う伯父さんとはお姉さんの育ての親のことだ。

「してないわ。きつと大反対する。相談するまでもない」

つまりまともに相談できる相手がいないわけだ。まあ伯父さんたちには余計な心配を掛けたくないってのもあるのだろうけど。

「とりあえず会ってみるって選択肢はないの？」
「ない」

会ってあげてもいいと思う。あたしだって生き別れた姉がいるって言われたら会いたいつて思うもん。まあうちの場合、ただ会いたいじゃすまないけど。遺産とか跡継ぎ問題とかいろいろ出てきちゃうからね。

でもお姉さんの言うことも解る。お姉さんと会いたい。でもなかなか会ってくれない。もしかしたら、娘の名前を出せば会ってくれるかもしれない。実父がそんなことを考えている可能性もある。それを考えると、お姉さんは会いたくないわけだ。まあ腹違いの妹って、実の父親が別の女と作った娘だからね。会いたくないって言うのも解る。あたしだったら気にしないけど。これもうちの家庭が特殊っていうことが影響しているかもしれない。

「あの・・・・・・・・」

みゆきが静かに口を開く。

「何でそんなにお父様が嫌いなんですか？」

それだ。あたしだってお父様のことは好きじゃない。というか、あたしの場合あまり会えないから、という理由もある。けど、あたしたちやお姉さんくらいの年齢の女子はあまり父親と仲良くないと思う。好き嫌いの度合いはそれぞれ違うと思うけど、大好きだと言える女子はあまり多くないだろう。しかし、そこはやはり親子。普通はそこまで嫌いになれないし、そこまできつい言葉を掛けられないだろう。そこに至るまでにはとても大きな壁を越えなくてはいい

ない。お姉さんはそれを越えてしまっている。一体何があったというのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お姉さんは口を開かない。当然だ。自分の一番深いところ。あまり他人には知られたくなくてもしょうがない。お姉さんの代わりに再びみゆきが口を開く。

「あ、あのすみませんでした！少し調子に乗ってしまいました。質問を取り消します」

空気に耐えられなくなったのか、みゆきは思わず謝った。いやみゆきは悪くない。普通は気になる。それに、みゆきは興味本位で聞いているわけじゃない。お姉さんを心配しているのだ。

「言いたくないなら、言わなくていいよ」

今度はあたしが口を開いた。

「でも、あたしやみゆきの気持ちも解ってくれるよね？あたしたちはお姉さんが心配なんだ。確かにあたしたちは部外者だし、何もしてあげられないかもしれないけど、相談くらいになら乗れるよ。もし手伝いが必要なら手を貸す。あたしたちができることなら何でもするつもりだよ」

もちろん本気だ。お姉さんの邪魔をするつもりはない。お姉さんのしたいことをすればいい。会いたくないなら、それでいいと思う。でも本当は会いたいのに、そうしないのであれば話は別だ。少なくともあたしはお姉さんの味方をする。

それからしばらく店の中は沈黙が続いた。あたしとみゆきは黙ってお姉さんの決断を待っていた。

「二人ともありがとう」

突然お姉さんはお礼を言った。まだあたしたちは何もしていないぞ？

「本当は誰にも言うつもりはなかったんだけど、もうここまでしゃべっちゃったし、もしかしたら心のどこかでは誰かに相談したかったのかもしれない。もういい時間だけど、話聞いてくれるかな？」

もちろん。あたしとみゆきは間髪いれずに頷いた。それを見て、お姉さんはいつもの笑顔でにつこり微笑んだ。そして、

「まずはお店閉めちゃおう。手伝ってくれる？」

「うん」

「はい」

あたしたちは店を閉め終わると、お姉さん宅のリビングに場所を移した。

「うーん、何から話したらいいのかな？」

お姉さんは困ったように笑い、話し始めた。

「私の実の母は、私を産んでからすぐに亡くなっているの」

予想していた展開だった。だが、やはり気持ちの変化はある。つらい話であるのだが、当のお姉さんは平然と話を続ける。

「確か、私が二歳のときだったかな？もちろんはつきりした記憶はないし、つらいかと聞かれても、正直解らない。写真でしか見たことないし。でも私は母に似ているみたい」

それからゆっくりマイペースに話を進めた。

今からだいたい二十年ほど前。樋口製菓という洋菓子専門店が経営していた工場の倉庫に車が突っ込む事故があった。倉庫を跡形もなく燃やし尽くすほどの事故だったにもかかわらず、死者は一人、負傷者は数十名に上ったがどれも軽傷で、入院患者はゼロだった。その唯一の死者は樋口美花。当時二十四歳。彼女の運転する乗用車が工場の倉庫に突っ込み、炎上。運悪くその倉庫には大量の小麦粉が保管してあったため、舞い上がる小麦粉に引火し、大爆発を起こした。その日は風がなかったため、周りの民家や倉庫に被害はなかったが、それでも例の倉庫全てを燃やし尽くす大火事となった。完全に鎮火するまで、実に十時間もの時間を要し、火が消えたときには何も残っていなかった。

遺体は焼け焦げていて、被害者を特定できる状態ではなかったが、車のナンバーから持ち主を特定し、後に鑑定結果から、乗用車の持ち主樋口勇人の妻美花であることが判明した。

原因は不明だったため事故として処理されそうになった。だが、話はそう簡単なものではなかったらしい。

「父さんたちは殺人だって言っているの」

「理由は？」

「二人の結婚はすごく反対されていたみたい」

お姉さんの実父樋口勇人の両親丈二と知恵は古い時代の人だったらしい。家柄や学歴っているものを重要視する人だったみたいだ。

その点、お姉さんの実母小林美花の実家は商店街の小さな和菓子屋。

「父さんの話によると、母は大変な嫌がらせを受けていたみたい」

美花とお姉さんの育ての父小林誠二は姉弟である。仲のいい姉弟だったらしく、そういった話もよく聞いていたみたいだ。お姉さんの育ての母小林ひかりも美花とは仲がよかったみたいで、お義姉さんと呼んで慕っていたらしい。誠二とひかりが勇人に対していいイメージを持っていないのも納得できる。

「じゃあ今の妻はどうなの？子供がいるってことは、今樋口勇人は再婚しているんでしょう？」

「うん。今の妻は自動車会社の社長令嬢みたい」

そういえばそんな話をつい先日聞いたな。今の妻は豊口自動車という自動車メーカーの社長令嬢豊口未来。

「じゃあ勇人は今二つの会社で社長を名乗っているの？」

「ううん。樋口製菓は弟の樋口才人が継いだみたい。私は会ったことないんだけど」

「じゃあ豊口自動車の社長？」

「そうみたいね」

お姉さんはよく知らないみたいだ。まあ二つの会社の社長を名乗るのは難しい。しかし、弟さんは運がいいね。あの事故のおかげで

社長になれたんだから。おっと、不謹慎だったな。

「とにかく父さんたちは樋口家を信じなかった。残った私を樋口家に渡すわけにはいかないと思ったらしく、裁判を起こして親権を取り、私を引き取ってくれた」

父さんとは育ての父小林誠二のことだろう。これで状況は理解できた。

「父さんたちは今でも殺人だと言ってているの。私は聞いた話だけど、殺人でもおかしくないと思っている。たとえそうじゃなくても母は死んで、あいつは幸せになっていることは許せない。父親とは認めない。だいたい勝手なのよ。そっちの都合で別の女と結婚してお金ができたから養育費送って、時間が取れるようになったから会わないか？全部あっちの都合。こちら側のことなんか一切考えてないじゃない」

お姉さんの言うことはもっともだ。確かに結果を見れば恨みたくなる。この件に関してあたしは何も言うつもりはない。問題はそこじゃない。

「でも小春ちゃんとは別。あの子は私に嫌われるようなことを何もしていないの。樋口勇人の娘っていうだけで嫌ってしまうのはよくないと思うの」

お姉さんはいい人だ。肩書きや見た目で人を判断しないのは、口で言えるほど簡単ではない。あたしだってとんでもない肩書きを持っているから、様々な憶測で解釈されることがある。それはとても腹立たしいことだ。だからあたしは人を見た目や肩書きで判断しない。お姉さんもきつと同じなのだろう。

お姉さんは小春ちゃんのことを嫌いじゃない。でも会いたくないという。それはきつと好きになつてしまうのを恐れているのだと思う。恨んでいる男の娘というだけで、嫌うことは嫌だが、恨んでいる男の娘と仲良くなるのも嫌ということだろう。そんなことを恐れるということとは、漠然とした予感があるのではないか。私はきつとその子と仲良くなる、という予感が。

口先だけの言葉を信じるならばお姉さんは会いたくない。しかし悩んでいる。ならば会わなくていいように説得すればいい。そうすればお姉さんの願いを叶えてあげられる。相談を受けた側の仕事をこなしたと言えるだろう。しかし、本当は会つてみたいと思つているなら、あたしは何をしてあげることが最良なのか。

お姉さんはすでに断つたという。ならばなぜまだ悩んでいるのか。その返事を後悔しているのか？それともまた連絡が来ることを見越しているのか。どっちにしてもまだ悩んでいることに疑問がある。心は決まつていない様子。

「ま、今更悩んでもしょうがないよね。それに結局決めるのは私なんだし、こんなこと相談されても困っちゃうよね。ごめん、ごめん」

お姉さんは話を終わらせ、無理矢理明るい雰囲気を作ろうとしている。いつもみたいに笑えてないよ。

「はい。この話はここでおしまい。二人とも聞いてくれてありがとう。すっきりしたよ。お礼といつては何だけど、二人とも紅茶に興味ない？一緒にブレンドしてみない？」

あたしとみゆきは頷くことしかできなかった。

今日あたしは問題を解決するためにここに来たのだが、新たに一つ問題を抱えることになってしまった。あたしもお人好しなのだろうか。

PHASE・8（前書き）

話もだんだん終わりに近づいてきました。おそろく小説に関しては
ゴールが見えているかもしれません。

PHASE・8

翌日の昼休み。あたしは廊下に立ち尽くしていた。ここは五組の前。目的は成瀬を呼び出すこと。さて、どうしたもんかね。呼び出すことについて迷っているわけではないんだけど、問題は呼び出す方法だ。一応面識はあるのだから、普通に呼び出せばいいのだが、このクラスには岩崎さんがいる。彼女に見つかる結構面倒なことになってしまっただろう。理由を追求されると困るんだ。本当のことを言ってしまうと、きっと彼女は手伝ってくれるだろう。しかしそれはこっちの本意ではない。彼女に迷惑をかけるわけにはいかない。とは言え、彼女を納得させるだけの嘘を用意していない。とにかく慎重に行こう。

あたしはそつと中を覗く。もしかすると、あたしは結構怪しかったかもしれないが、そんなことはどうでもいい。ドアに隠れて中を確認する。えーっと岩崎さんはどこかな？おや、いない？いないぞ！よし、これで難関突破だ。さて、これで安心して成瀬を呼び出せるぞ。つと、肝心の成瀬はどこだ？やや！あの野郎、女子に囲まれてやがる。と言っても三人だが、それにしても驚きだ。あの野郎、友達？何それおいしいの？みたいな顔しているくせに、普通によくやっているじゃないか。邪魔しちゃ悪い。今度にしよう。

何て思うかよ。あたしは、たった今教室に戻ってきた女子を捕まえた。

「ねえ、ちょっと」

「え？な、な、な」

おや？驚かせてしまったかな？いや、いくら何でもそんなに怯えた目をしなくてもいいじゃないか。とにかく用事を済まそう。

「あのさ、成瀬呼んでくれない？」

あたしがそういうと、その女子はかくかくと首を上下に振った。了承ということでもいいのかな？そして、

「なな、成瀬君！」

素っ頓狂な声を上げて成瀬を呼んだ。どうやらあたしは人選ミスをしてしまったらしい。

「あの、呼んでいます」

と言って、彼女はあたしを示した。あたしは申し訳ない思いから苦笑い。成瀬はため息。まあ連絡手段がないのだから仕方ない。とにかく可及的速やかに用事を終えよう。あたしはクラス中の注目を浴びてこっちにやってきた成瀬にまず一言。

「ごめん。迷惑かけたわ」

「気にするな。あいつはいつもあんな感じだ」

そっか。そりゃよかった。それで、

「今時間ある？話したいことがあるんだけど」

成瀬は黙って頷き、

「場所を変えよう」

と言って階段のほうへ移動した。あたしも追いかけてようとして、ふと教室の中を見た。すると、成瀬と話していた三人と目が合った。

「もしかして、取り込んでた？」

あたしは前に行く成瀬に話しかけた。

「いや。大した話をしていたわけじゃない」

成瀬は歩を進めながら答えた。本当か？先ほど目が合った女子のうち二人は結構パンチの効いたいい目をしていたぞ。あたしの頭に一つ予感めいた考えが浮かんた。

「もしかしてさっき話してたのって、部室荒らしの関係者？」

「そうだ。知り合いか？」

いや、知らないよ。でも、彼女たちの目を見れば何となく解る。岩崎さんもたまにあんな目をするからね。

「あんた、女友達とかいたんだ」

「友達じゃない。ただのクラスメートだ」

ただのクラスメートねえ。ま、間違っちゃいないと思うけど。

「たぶん向こうはそう思っていないと思うよ」

あたしはいい意味で言ったのだが、

「そうかもしれないが、しょうがないだろ。同じクラスにいればみ

んなクラスメートだ」

成瀬はよくない意味で捉えたようだ。こいつは好意に鈍感だな。お姉さんより重症だ。こいつは友達いるのか？下手すると、岩崎さんもただのクラスメートっていう可能性もあるぞ。うん？そう考える・・・、

「あたしは？」

あたしはクラスが違うからクラスメートじゃないぞ。まさか、同学年の女子か？

「あんたは俺たちの切り札だ」

「は？」

どういう意味だ？理解できんぞ。俺たちって誰だよ。切り札って？

あたしが頭に疑問符を浮かべていると、目的地に着いた。どこに行くのかと思ったら、中庭か。

「それで、何の用だ？」

ベンチに腰掛けた成瀬は、かばんからお弁当を取り出しながら言った。こいつ、この場で食べるのか？

何かいろいろ言いたいことはあるが、とにかくあたしは用を早く済ませたい。仕方ない。切り札の追及はまた今度にするか。

「お姉さんのこと、いろいろ解ったから一応話しておくよ」

成瀬の表情に変化はない。しかし、まとう空気が変わったような気がした。

「嫌なセリフだ。実に聞きたくないな」

「一度了承したんだ。嫌でも協力してもらうよ。男に一言はないでしょ」

「そんな誰が言ったか知らないような言葉、何の役にも立たないぞ」

面倒なやつだな。あたしは早く済ませたいんだよ。素直に聞け。

「ちよつと長くなるから、最後までちゃんと聞いてよ」

あたしは成瀬の言葉を無視して、本題に入った。内容は昨日の話だ。あたしが話を始めると、成瀬は箸の持つ手を止めて一言も声を発さず、終始無言で聞いていた。まさか寝ていたなんてことはないだろう。その証拠に、話が終わると、

「なるほど。一応内容は理解できた」

成瀬は納得の声を上げた。

「それで、あんたはどうしたいんだ？」

「あたしはお姉さんと小春ちゃんを会わせてあげたい」

あたしはお姉さんの話を聞いて、お姉さんは会いたがっているように見えた。だからあたしはお姉さんの背中を押してあげたい。会う勇気をあげたいと思った。

「彼女は会いたくないと言っているのか？」

「それはきつと本心じゃない」

「あんたの勘違いかもしれないぞ」

その可能性はある。でも、あたしの考えは揺るがない。

「それでも、会わせてあげたい」

成瀬は再び考え込んだ。

「例の三千円の件はどうするんだ？」

「それもやるよ」

別に忘れてたわけじゃないぞ。ものには優先順位があるんだ。しかもそれは時によって揺らぐ。暫定的なものなんだ。今は二人を会わせてあげることが一番。だと思っ、たぶん。

「じゃあ俺は何をすればいい？」

「あんたは三千円について考えといてよ」

「つまりこの件について、俺は関わらなくていいってことだな」
「そうだよ」

いちいち確認しなくてもいいよ。あんたにこれ以上迷惑はかけないから。

「名前は解ったし、だいたいの親族関係も解ったでしょ。それとも、他に何か必要？」

「そうだな、しいて言うなら、その事件の資料だな」

「え？何で？」

「好意や同情からの援助金だとしたら、間違いなくこの事件が関係している」

そういえばそうだな。養育費もこれに関係しているといえそうだし。

「解った。調べておくよ」

「できるだけ詳しいものがいい。それこそ警察の事件調書くらい、な」

簡単に言っな。あたしだってできないことがあるんだぞ。でも、まあこれくらいならできるけど。でもお父様に知られると結構厄介なんだよな。うーん、仕方ない。あたしからお願ひしているわけだし。

「解ったよ。いつまでにやればいい？」

「そっちの都合に任せるよ。できれば土日までによろしく」

土曜は明日だぞ。今日中にやれというのか？むちゃくちゃだな。

いつの間にか食べ終わったお弁当をしまつと、成瀬はかばんから例の本を取り出した。

「これ返しておく」

「うん」

「ところで、あんたはこの本解けたのか？」

いきなり何を言い出すんだ？正直今はそれどころじゃないんだけど。

「まあできたけど」

「それじゃあ答え合わせしておこうか？」

は？何言っているんだ？必要ないだろう。

「何で？今やる必要あるの？」

正直今話し合うような内容じゃないぞ。それ以上にいろいろやる
ことがあるだろ、お互いに。

しかし、成瀬は、

「まあいいじゃないか。一言で終わる。あんたの見解を教えてください」

と言つて引かなかった。これに関しては全く意味不明だ。探偵ご
つこが好きだったのか？それとも解けたことが嬉しかったのか？変
なやつだ。だが、成瀬の言うとおり一言で終わる。これ以上押し問
答するよりはさっさと言つてしまったほうがいいだろう。時間もな
いし。

「あたしは——だと思つただけだ」

すると、

「俺も同意見だ」

そうかい。あたしがせっかく成瀬の言うとおりにしたのに、その
一言で終わってしまった。一体何だつていうんだ？理解不能だぞ。

直後チャイムが鳴り響き、あたしと成瀬は解散することになった。
聞きたいことはいろいろあったが、それはまた後日ということにな
った。何かいろいろ納得いかない。意味深なことばかり言うから、
気持ち悪いじゃないか。

PHASE・8（後書き）

次回、小説の解決編です。

PHASE・9（前書き）

小説解決編です。ちよいとミスしましたが、解けないことはないと思つので、頑張つて下さい。

PHASE・9

放課後、あたしは今日もここに来ていた。しかし全く落ち着かない。原因は成瀬だ。あいつ、一体何が言いたかったのだろうか。他愛のない会話だったのだが、あいつが言うのと妙に気になる。くそう、もっと他に考えなきゃいけないことがあるのに、全然集中できないじゃないか。あー、むしゃくしゃするな。

今日はなかなか繁盛していて、お姉さんは忙しそうに動き回っている。この様子じゃ、お姉さんと話ができるのはしばらく後になりそうだな。あたしはかばんから例の本を取り出した。暇だし、一応内容を確認しておこう。そういえば、エピソードの部分を確認していなかった。うーん、推理には関係ないと思うけど、読んでおくか。

三人の容疑者の取調べは粘り強く行われた。しかし、芳しい結果は得られず、最終的に証拠不十分として三人は不起訴、この事件は不注意による事故として処理されることが決定した。フローラの弟ヴァールハイトとその妻リユミエールはその後殺人だと、警察に訴え続けたのだが、結局認められず、警察はこの事件から速やかに撤退していった。

ブレーブの手元には出すはずだった婚姻届とその中に入っていたフローラの婚約指輪だけ残り、ブレーブの手元に残るはずだった愛娘リーラは、ブレーブに対しても敵対心を持ったヴァールハイトとリユミエールによって裁判を起こされて無理矢理親権を奪い取られ、引き取られてしまった。二人の思い出の品は全て燃えてしまい、

残ったものは婚約指輪だけ。自分のものは棺の中にいれ、フローラが常に身につけていた指輪は彼女の形見として自らの手元に保管することにした。いつか、愛する愛娘に送るために。

事故から二年、ほとぼりが冷めると、両親と復縁したブレイブは、当初のとおりアヴニールと結婚。アヴニールの実家の力もあり、見事に家は財政を立て直し、ブレイブはジョージのあとを継いだ。さらにアヴニールの実家が行っていた機械産業の工場の工場長も任され、底をつきかけていた財力はどんどん満たされていった。家庭のほうでも、結婚から六年後、娘クロリスをもうけ、ブレイブは失くしたものを取り戻していった。

再び幸せを取りもどしたブレイブは、もう一人の我が子にもその幸せの一部を分け与え始めた。ブレイブはリーラに贈り物を始めた。そしてヴァールハイトたちには心ばかりの生活費を送った。全てはリーラの幸せのために。これはフローラの願いでもあった。フローラはブレイブとリーラの幸せを願っていた。ブレイブは再び幸せを取り戻した。次はリーラの番である。ブレイブはできることをした。とにかくリーラが幸せになってくれるよう毎日願った。

月日は流れ、事故から十余年が経過していた。その日もブレイブはリーラの幸せを願い、贈り物を箱詰めしていた。するとクロリスがカルセオラリヤの花を一輪ブレイブの元に持ってきた。

「僕にくれるのかい？」

尋ねると、クロリスは首を振った。そして、

「私も贈り物する」

ブレーブは驚きを隠せなかった。

「リーラのことを知っているのかい？」

「うん。私のお姉さん」

このセリフを聞いた瞬間、ブレーブの目から涙があふれ出た。忘れていた。クロリスはリーラの妹だった。ブレーブは今までクロリスに黙っていたことを嘆いた。

「誰に聞いたの？」

「知らないおじさん」

同時にクロリスに教えてくれたそのおじさんに感謝した。

「クロリスも毎回贈り物するかい？」

「うん」

それから毎月の償いの儀にはクロリスも参加するようになり、二人はこの儀式を欠かさずに続けていった。おそらく一生続けるであろう。リーラが許してくれるその日まで。

あたしはパタンと本を閉じ、一口紅茶をすすった。うむ、いつもどおりおいしいのだけど、なぜか満足できない。落ち着きもしない。全く嫌な気分だ。

「どうしたの？何か落ち着かないみたいだけど」

そら見る。お姉さんに筒抜けじゃないか。何か感づかれたらどうするんだ。これもあいつのせいだ。

「何か不安なことでもあるの？」

「不安というか、気になることがたくさん」

すると何を考えたのか、お姉さんは嫌な感じでにやっと笑った。

「もしかして成瀬君のこと？」

「うん、まあ」

成瀬のことでもあるし、お姉さんのことでもある。それにしても何で解ってしまったのだろうか？

「え？本当に？」

「まあね」

この人はエスパーなのか？と、電波なことを考えてしまったが、答えは何てことはなかった。

「ゆかりちゃんにもようやく春が来たのねえ」

ただの勘違いだった。何だ、びつくりしたじゃないか。あたしはため息をついた。

「そんな浮ついた話じゃないよ」

どちらかというと、かなり現実的な話だ。

「なーんだー」

お姉さんはがっかりした様子。まああたしとしてもがっかりだよ。お姉さんがエスパーだったらよかったのに。

「じゃあどんな話なの？成瀬君が関係しているのは間違いないんでしょう？」

残念ながらお姉さんには話せないんだよね。誰よりも当事者なのに。

「ナイシヨ」

とあたしが誤魔化すと、

「えー」

と言い、かわいく頬を膨らませたが、適当に流してくれた。

「成瀬君で思い出したんだけど、」

今度は何だ？と、どきまぎしていると、

「推理小説の進み具合はどう？成瀬君、何か言ってなかった？」

何だ、その話か。あたしは見えざる手で胸をなでおろした。ふう。

それにしても成瀬といい、お姉さんといい、そんなにこの小説が気になるのか？あたしは大して興味を持ってないのだが。まあ百歩譲って面白いと思うけど、何度も読む気にはなれない。あたしはこっぴどい重い話の作品は好きではないのだ。

「私もまた考えてみたんだけど、やっぱり解らなかったよ」

さて、どうしようかね。別にここであたしが解答を教えてあげても構わない気がする。成瀬と同じ答えだったし、間違えてはいないはずだ。たぶん問題ないでしょ。あたしも教えてあげたい。あたしのプライドがそう言っている。

「教えてあげようか？」

「え？ ゆかりちゃん解ったの？」

「うん」

「すごいじゃん！ ね、教えて？」

これだよ、これ！ 何かが復活した。あたしのアイデンティティーが舞い戻ってきた気がした。やっぱりこうでなくては。しかし、本番はこれからだ。しっかりやらないと。

「結構長い話になると思うけど、お店どうする？」

あたしは閉めた後でって言おうと思ったんだけど、お姉さんは少しも考えずに、

「今閉めちゃおう！」

うーん、いいのかね。あたしがここ来ると、かなりの高確率で閉店時間前に店を占めてしまっているような気がする。今度からはもっと高価な注文をしよう。夕飯もここで食べようかな。

閉店作業を終えたあたしたちは、今日もお姉さんの自宅のほうに戻って、話を始めた。

「この話は事故として処理されたけど、きちんと説明できていないポイントがあるの。それをしっかり説明できるような仮説を立てればいいわけ」

「そのポイントってというのは？」

ポイントは大きく分けて三つある。それを今から一つずつ考察していこう。

「まず一つ目。何であの方法を選択したのか？」

あの方法とは、睡眠薬を飲ませ、油を火にかけたまま放置するという方法のことである。確かに火事になって、フローラは死んだ。しかし確実な方法だと言えるだろうか。

「その場で直接火をつければ確実だよな？でもそれをしなかったのはなぜか」

「でも油って一定時間火にかけていると発火するんですよ。確実なんじゃないの？それにアリバイを作るには時限装置っぽくていいと思うけど」

そこはそうだね。でも、

「時限装置としては発火の時間が不確定すぎる。それに睡眠薬のほうも確実じゃないよ」

あれは薬物の一種。人によって効き目が違ってくる。どのくらいの量を飲ませれば、どのくらい眠っているかっていうのは完全に把

握することはできない。加えて睡眠薬には依存性もあるし、耐性もある。フローラが普段から服用していれば、また計算はずれてくる。不自然な睡眠をして目覚めたあと、油が火にかけられたまま放置されていれば、どんなに鈍い人でも命が狙われていると気付くだろう。そして、その前に誰か来ていたならその人物が明らかに怪しい。失敗したときのリスクが高い。

「他に取ることができると手段があれば別の手段を使うよね」
「うーん。そうかもしれないね」

うなりつつだが、お姉さんは納得してくれた様子。よし、じゃあ次行こうか。

「じゃあ二つ目。何で指輪と婚姻届はブレードが持っていたのか」

家を跡形もなく燃やし尽くした火事。家にあつたら婚姻届はもちろん、指輪だって原形を留めないだろう。もちろん可能性はある。だが、ブレードが持っていたという解釈のほうが幾分現実的である。

「婚姻届は出しに行つたんじゃないの？」

ま、ないとは言えないけどね。でも、

「それなら婚姻届を持って家を出た、っていう描写が必要だと思わない？いろいろな困難があつたけど、それを乗り越えてようやく結婚するに至った二人なんだから、婚姻届を提出することって重要なイベントだよな」

持って出た描写があるいは今日出しに行くみたいな会話が必要だろう。

『帰ってきたら、僕たちは正式な夫婦だ』

みたいなくさいセリフがあってもおかしくはない。

「まあ百歩譲って作者が素人ゆえにその重要さに気がつかなかったとする。でも指輪は？婚姻届を出す上で指輪は必要ないよね」

「確かに」

お姉さんは深く頷く。よし、順調だな。これで二つ目終了だ。

「最後三つ目。ブレーブはなぜ事故を受け入れて、再婚に踏み切れたのか」

ブレーブは事件直後、殺人だと推測して、その後確信までした。しかし、事故として処理した警察に対して何も文句を言わず、しかも、殺人を犯した犯人だと推測した両親と復縁し、再婚までしている。それはおかしくないか？

「それは、結局証拠が見つからなかったから？」

「確かに証拠は見つからなかったね。でも一度疑った両親に対してそう素直に従えるかな」

「うーん」

この三つのポイントによって、あたしは一つの結論を導き出した。事故はありえない。かと言って、殺人という線も怪しくなってきた。じゃあ残る選択肢は何でしょう？

「この三つのポイントをうまく説明できるように考察をすると、答えは一つに絞られてくる」

あたしは、一つためを作ると、その答えを口にした。

「答えは、フローラの自作自演。つまりフローラは自殺によって命を落とした」

これ以外に不可解なポイントを説明できる答えはない。自殺なら全てを説明できる。

「最初に言った睡眠薬。あれは単純に怖かったから」

鏡を見ながら喉に包丁刺せる人はいないよね？それと一緒にでじわじわ広がる火をじつと見ていられる訳がない。だが、睡眠薬を飲めば恐怖はなくなる。

そして二つ目。これも自殺という結果なら解釈するのは簡単だ。

「やっとの思いで作成した婚姻届。二人にとって特別なものであるのは間違いないよね？でも今から火事を起こす家に置いといては当然燃えてしまう。きっとフローラはそれが忍びなかった。たぶん指輪も同じ理由だと思う。もしかしたら愛する我が子に取っておこうと思ったのかもしれないよね」

全て予想でしか語れないけど、出て行くブレイブのかばんが何かに忍ばせたのではないだろうか。

「三つ目は完全に想像だけど、ブレイブには遺書があったんじゃないかな。婚姻届と共にブレイブのかばんに忍ばせておいたんじゃないかな」

内容は、私のことは忘れてくれ、とか、自殺であることは言わないでくれ、とかあるいは、アヴニールと結婚して幸せになってくれ、とか書いてあったかもしれない。

他の誰でもない、愛するフローラの願いだ。ブレーブは自分の思いを押し殺してでも、フローラの自殺は黙っておこうと考えていたかもしれない。この事故で自分たちはよくない噂にまみれることになったが、自分のために命を投げたフローラの痛みには比べれば大したことはない。

想像するに、きっとフローラはこれ以上ないほど幸せだったのではないか。世界で一番愛する人と一緒になることができて、愛する子供をもつけた。様々な困難はあったが、最終的に一軒家を買って、三人で住むことができたのだ。本当に幸せだったのだろう。しかし、ブレーブはどうだろうか。自分と結婚することで、親に勘当されてしまった。跡継ぎとして手に入れるはずだった多くのものを全て失ってしまった。ブレーブが気にするなと言っても気にしてしまう。親に嫌われる幸せなどあるだろうか。その元凶は自分なのだ。そんなことを思っているうちに、フローラは自殺を考え始めたのではないか。

「ま、自己満足だね。フローラが幸せだったように、間違いなくブレーブも幸せだったよね。でも、それがフローラに伝わっていなかったんだね」

愛し合う二人にもすれ違いが合ったのだ。やはり言葉にしないと伝わらないものがあるってことだね。愛し合う二人だからこそ、きつと口にしないではいけなかったのだろう。思い合う二人がすれ違ってしまふのは恋愛小説の王道だけど、やはりあたしは好きになれないよ。切な過ぎるよ。

あたしが物語の余韻に浸っていると、お姉さんが、

「それなら何で火事にしたの？他の手段でもよかったんじゃないの？」

言葉の雰囲気から、お姉さんはあたしの推理が気に入らないわけじゃないようだ。おそらくあたしと同じ気持ちなのだ。こんな悲しい自殺を認めることができないのだ。

「これもあたしの想像だけど、家を壊してしまいたかったんじゃないかな」

ブレーブに帰る家があつては、実家に帰らないかもしれない。両親と仲直りしてもらわなくては意味がないのだ。他には、

「ちょっとしたいたずら心もあつたかもね」

「どういうこと？」

「フローラはブレーブのために自殺をした。でも結果的にジョージとアテナ、アヴニールのためにもなってしまった。自己犠牲をしたフローラとしては面白くないよね。ちょっとは三人にも痛い目見てもらいたいって思っても仕方がないと思わない？」

首吊りや飛び降りでは最初から自殺で片付けられてしまう。でも火事なら当然警察も動く。そしたら彼らは確実に疑われる。彼らが容疑者として扱われているのを見て、もしかしたらフローラはざまあ見ろって思っているかもね。

でも冤罪で捕まる可能性もあるから、やっぱり遺書は用意していたと思う。そこまで冤罪を擦り付けて捕まえるほど、彼らのことを

恨んでいるとは思えない。そんな人だったら自己犠牲の自殺なんかないよね。

「なるほど!」

お姉さんはしばらく考えていたのだが、納得の声をあげた。

「どうかな、納得できた?」

「うん。ありがとう、ゆかりちゃん」

お姉さんは本をパラパラと捲った。

「うん、自殺かあ。そう考えると、フローラのセリフ一つ一つが深く見えてくるね。迷惑かけてごめんなさいって言うのは、火事のことを言っていたのかなあ」

全ては物語。そして想像だ。でも、

「じゃあ愛しているって言うのが最期の会話になったのもフローラが意識して言っていたのね。私のことは気にしないで、でもリーラのことは……ってところでもうすでに自殺を意識していたのかも知らないね」

お姉さんは嬉しそうだった。この解答によって、お姉さんはより一層この本が好きになった様子。あたしはいい仕事ができたと感じた。このあとも、ずっとこの本の話で盛り上がった。

PHASE・9 (後書き)

もしかしたらまた後日編集するかもしれません。申し訳ありませんでした。

PHASE・10（前書き）

次回三千円の解決編です。

翌日、あたしは立ち尽くしていた。場所は成瀬の住んでいるマンションの前。何だ、あいつ。こないところに住んでいるのか？ 確か一人暮らしっていう話だったが、あたしは場所を間違えたのか？

エントランスに入ると、オートロックを開錠するためのテンキーがある。最近個人情報とかの問題でエントランスに表札がない。厄介だな。万が一間違えて覚えていたらどう責任とってくれるんだ。

あたしは、誰に対しての愚痴か解らないセリフをぶつぶつ呟きながら、覚えていた部屋番号を打ち込む。しばらく待つと向こうから反応があった。緊張の一瞬だ。

「はい」

「あー、あたしだけど」

と名前を言わずに名乗ったのだが、相手は、

「ああ、あんたか。上がってくれ」

と普通に返事をくれた。どうやら当たっていたようだ。ふう。いや、まあちよつと考えたら普通のことなだけだね。

エレベーターで上に上がり、成瀬の部屋を訪れたあたしはまたしても絶句していた。何だ、この部屋は。普通に四大家族で暮らせるだろ！一人暮らしで、しかも高校生が3LDKに住むな！全国の一般人に謝れ！

「何で一人暮らしなのにこんなでかい部屋に住んでんの？」

「さあな。そればかりは用意した親に聞いてくれ」

おいおい。望んだわけでもないのにこんないい部屋に住んでいるのか？こいつの実家は何をやっているんだ。実はこいつもいいところの坊ちゃんなのか？さすがのあたしだって頼みこまないとここまで広い部屋用意してもらえないぞ。

「あんた昼飯は？」

「まだだけど」

あたしは辺りをキョロキョロしながら部屋に上がった。考えてみれば失礼だったし、スーパー美少女お嬢様としてあるまじき行動だった。それにしてもきれいな部屋だな。侍従でもいるんじゃないか？とてもじゃないけど、男子高校生の一人暮らしとは思えない。

「ちょうどいい。今から何か作るところだ。食べたいものはあるか？」

振り返ると、成瀬はエプロンを着用していた。つまり成瀬が作ってくれるわけだ。

「何でもいいよ。昼にふさわしいものをお願い」
「了解」

そう言つと成瀬はキッチンに入った。あたしはリビングで待機。あ、そういえば。

「昨日、お姉さんに小説の話しちゃったから」

報告する必要があったかいまいち不明だったが、一応言っておいたほうがいいだろう。仮にも体裁上そっちがメインなのだ。まあ、こいつがそんなこと気にするとは思えないけど。

「そうか」

案の定、成瀬の反応は淡泊だった。

「反応はどうだった？」

「よかったと思うよ。嬉しそうだったし」

昨日のお姉さんはいつにも増して楽しそうだった。そのせいで昨日はなかなか帰らせてもらえなかったけど、まあ許容範囲だ。

「そりゃよかった」

確かによかったけど、あんたがそう言うと思わなかったね。そんなに気にしていたのか？

しばらく待ち、食事が出来上がるとそろって昼食タイムとなった。

むう。相変わらずいい腕しているな。味だけでなく、見栄えにもこだわっている辺り、本格的と言えよう。そこで思わず一言。

「あんた、料理人になりたいわけ？」

正直男子高校生の自炊の域を超えているぞ。今の時点でこのレベ

ルでは、将来板前かシェフだろう。全くイメージできないけど。

「別にそんな先のこと考えて料理しているわけじゃない。節約のことを考えると、どうしても弁当が必要だ。ならば少し真面目に料理を試してみようと思ったただけだ」

本当にそれだけか？それにしちゃあずいぶん本格的な料理をするな。少し真面目について本気で言っているのか？しかし、こんな広い部屋に一人で暮らしていて節約なんて言葉が出てくると思わなかったね。この様子じゃ、仕送りも結構な金額もらってそうだが、おそらくほとんど使われていないだろうな。

あたしたちは適当に会話を紡ぎながら食事を進めた。大半は下らない世間話だったが、それなりに楽しめた。

「例の資料は手に入ったか？」

食器の片づけが終わると、成瀬は開口一番こんなことを言った。当然だ。間違つて忘れてきていたら、あたしは昼食を取りにここに来たことになってしまう。あたしはそんなイージーなミスはしない。

「当時はちよつとした話題になつたみたい。結構大きな事故だったみたいよ」

あたしは資料を手渡しながら言った。

車が倉庫に突っ込み炎上。舞い上がる小麦粉に引火して、粉塵爆発。それだけで十分大きな事件だったのだが、加えて、倉庫を保有する会社、唯一の被害者が全国紙の一面を飾る大事件になった大

な要因だった。

成瀬はコーヒを片手に資料を眺めている。その目は真剣そのものだった。この事件はすでに二十年経過している。今となっては過去の事件だ。殺人だったとしても時効が成立している。なのになぜそんな事件にこの男がそこまで真剣になるのか、このときのあたしはまだ理解できていなかった。

「なるほど、ずいぶん複雑な事件だな」

ふと成瀬が呟いた。そのとおりだ。お姉さんの話では出てこなかったところに、とても複雑な経緯があった。

事件の場所は樋口製菓の保有するとある工場。被害者は樋口美花。樋口製菓の専務樋口勇人の妻だ。単なる不幸な事故かと思われたが、事故後の捜査で美花と、勇人の両親丈二・知恵は不仲だったということが解った。また美花の乗っていた乗用車に整備不良があったことも判明した。ブレーキの故障とオイル漏れ。どちらも故意にやられたものだったらしい。その乗用車は、後に勇人の妻となる豊口未来の実家豊口自動車製造整備を担当していたというのだから、事態は急変。殺人説が急浮上してきたってわけ。

しかし、全体的に不明瞭な点が多く、殺人と決定付ける証拠も見つからなかったため、当初のとおり事故として処理されるに至った。

あたしも目を通したが、かなり曖昧な情報ばかりで、理解できないところが多かった。確かに殺人の可能性が高かった。しかし、なぜこの方法が取られたのか、納得のいく解釈がなされていない。またその日、なぜ美花が工場に向かったのかも解っていない。ま、結局のところ無罪が証明されたわけじゃなく、単純に証拠不十分だ

ったのだ。

しばらく無言で資料に目を通していた成瀬だったが、おもむろに資料を置き、コーヒーを一口すすると、口を開いた。

「あの店の閉店は何時だ？」

「え？えーっと……」 実は知らないな。いつも閉店時間前に、お姉さんが勝手に閉めちゃうから。って、ちょっと待て。ということ
は、

「あんた、今日行く気？」

「ああ」

成瀬は簡単に言つてのけた。てことはつまり、

「解つたの？三千円の送り主が」

「ああ、おそらくな」

それは本当か？あたしはさっぱりだぞ。

「それで、自信はあるの？」

「さあな。ちなみに証拠はない」

ちなみにじゃないよ。証拠はないって？それでお姉さんを納得させることができるのか？まさか、本当に『間違えました、ごめんなさい』とでも言うつもりか？

「心配するな。おそらくあっている。それにこれは小説と違う。し
かるべき人に聞けば、正解が解るんだ。本当に知りたかったら、そ
うちに任せればいい」

正解が解るだど？しかるべき人って誰だよ。こいつ、始めから当てるつもりないんじゃないだろうか。いや、こいつはそんな無責任なやつじゃない。と思う。

「俺の仕事は三千円の送り主を特定すること。そのほかのことは知らないぞ。俺は今日行くつもりだが、あんたはどうだ？」

解ったんだつたら早いほうがいいのは間違いない。まあいい。成瀬を信じて依頼をしたんだ。最後まで信じてやる。毒を食らわば皿までも、だ。

「いいよ。解った、あたしも今日行く。間違つてたら承知しないから」

「悪いが、責任は取らない。俺は卑怯者だからな」

あたしたちは、成瀬の家を出発した。

PHASE・11（前書き）

解決編です。楽しんで下さい。

PHASE・11

「今日は話があつて来ました」

閉店時間となり、客がはけると成瀬は重々しく口を開いた。

「どうしたの？改まっちゃつて。あの小説のことなら聞いたわよ」

今日はそのまま店で話している。きつと昨日みたいにはならないだろうから。

「そのことは聞きました。ですが、今日は別のことです。時間平気ですか？」

成瀬はいつもどおり、表情を変えずお姉さんの顔をじつと見つめている。

「うん、時間は大丈夫だけど……」

お姉さんは困惑した表情であたしに視線を向けた。

「あたしからもお願い。話を聞いて」

お姉さんは頷いた。まだ困惑した様子だが、これでとりあえず話を始められる。

「話を始める前に、まず謝らなければなりません」

「え？謝るって何を？」

「俺は小説の依頼を受けてここに来たわけではありません」

お姉さんは理解できていない様子で、頭の上に疑問符をたくさん浮かべている。

「どういうこと？ゆかりちゃん」

仕方ないな。ここまで来て黙っている意味はない。ここでネタバシだ。

「ごめん、騙すような真似して。あたしは成瀬に、例の三千円のことを頼んだの」

「え……………」

もちろんあたしは騙そうと思っていたわけじゃない。でも結果として騙していたことに変わりはない。きちんと謝罪すべきだ。

「俺からも謝罪します。成り行き上とはいえ、無関係の身でプライバシーを侵害しました」

「あんたは謝らなくていいよ。悪いのはあたし一人だから」

お姉さんは驚きを隠せない様子で、まだ一言も発していない。

「勝手なこととしてごめん。でもさ、あたしは本当に心配だったんだよ。お叱りの言葉は後で聞くから」

あたしが真剣に言っていることを理解してくれたのか、お姉さんは表情を緩めてくれた。

「もう。言ってくれば私も手伝ったのに」

「ごめん」

ちょっと回りくどかったね。でも結果オーライでしょ。

「もう謝らなくていいよ。それで、」

お姉さんは視線を成瀬に移す。

「送り主は解ったの？」

「俺は話を聞いただけです。ですから断定はできませんし、自信もありません。発言に責任も持ちません」

成瀬は後ろ向きな前置きをした後で、

「とりあえず自分で妥当だと思える見解にはたどり着きました。ちなみに証拠はありません。全ては俺の推測です。気になったら自分で調べることをお勧めします」

「うん。解った」

お姉さんは苦笑気味に返事をした。しかし、どうしてこいつは自分のことを信じてやれないのかね。思わずあたしのため息。

まあいい。とりあえず話を聞こうじゃないか。

「先ほど言ったとおり、過去の話聞かせていただきました。詳しく聞いたのは昨日が初めてだったのですが、俺はどこかで聞いたことがあるように感じました」

そりやどついうことだ？よくある話ってことか？それとも、

「あの事故のこと、知っていたの？」

可能性はある。二十年も前の話だが、過去の事件が新聞やニュースに上がることもしばしばあることだ。

「始めはそれを考えました。しかし、細部を聞いていくうちにその感覚は失せていきました。つまり、似たような話とごっちゃになったのでしょーう」

そんなこともあるだろうよ。確かによくある話だ。しかし、何が言いたいのかよく解らない。その話がどうかしたのか。

と思っていると、成瀬はあたしに視線を移した。

「あんたはどうだ？聞いたことなかったか？」

え？いきなり話を振るなよ。そうだな、えっと……。

「まあある気がするけど、うーん……」

どうだろうか。聞いたことある気がするけど、詳しくは思い出せないな。お姉さんも首をかしげている。うーむ……。すると成瀬が、

「権力を持つ家の長男が貧しい家の娘と恋に落ち、二人は娘を授かる。しかし、男は親に反対されていて、しばらくして女が事故で亡くなる。その後男は両家の娘と結婚。またしても一人娘を授かる」

ざっくり内容を説明しだした。本当にざっくりだな。いや、ちょっと待てよ。この話、どこかで、しかも最近見たな。何だっけなー？

「あー！」

あたしとお姉さんは同時に声を上げた。それってもしかして、

「あの本……」

例の、あたしが推理を頼まれていたあの本と全く同じだ。

「そう。あの『すれ違う想い』とストーリーが瓜二つなんだ」
「どういうこと？」

お姉さんは再び成瀬に尋ねる。このタイミングでこの話をしたんだ。全く無関係ってわけじゃないだろう。知らないってのもなしだぞ。

「この本が事件に関係しているの？」

案の定、成瀬はあたしの問いに頷く。やはり。だが、どういうことだ？ まさか、

「この本はあの二十年前に起きた事件を元にして書かれた、ノンフィクションだ」
「え！」

あたしとお姉さんはまたしても同時に驚いてしまった。いや、こりや誰でも驚くだろう。どんな超展開だよ。

「ちょっと待つてよ。確かに似ているのは認めるけど、さすがに飛躍させすぎじゃない？ この本が出版させたのは昨年だよ。事件は二十年前。何でこのタイミングで出版されんのよ！」

「そんな作品いくつもあるだろう。広く見れば歴史小説のようなも

のだ。別におかしくはない。それに……本ありますか？」

お姉さんは後ろの棚から本を取り出し、成瀬に手渡した。

「似ているなんてもんじゃない。登場する人物の関係が全く一緒だ」

成瀬は本を受け取ると、ぱらぱらとページを捲った。

「根拠はまだあるぞ。登場人物の名前だ」

成瀬は一枚紙を取り出すと、そこに事件の関係者と本の登場人物の名前を書いた。

「ブレーブは英語。意味は勇ましい・勇敢な。リュミエールは仏語で意味は明かり・光。ヴァールハイトは独語で真・誠。リーラも独語で紫。アヴニールは仏語で未来だ」

それぞれ対応する人物の名前が一致していた。こんなことが偶然で起こるはずがない。

「まだあるぞ。アテナはギリシャ神話に出てくる女神で、知恵・芸術を司る。フローラは花と春と豊穣を司る女神で、ギリシャ神話ではクロリスに当たる。ジョージは、まあそのまま丈二でいいんじゃないか」

見事に一致している。こりゃあ、信じざるを得なくなってきたな。本当にこの二つは同じものなのか？もし本当にそうだとすると、一つ仮説ができるな。

あたしはお姉さんを見た。お姉さんは顔を伏せている。あたしの

位置からでは表情は見えないが、かろうじて見える口元は真一文字になっていた。お姉さんも気付いているのだろうか。

「まだ何かあるか？なければそろそろ本題のほうに入りたいんだが」
「仮に！」

あたしは思わず叫んでしまった。落ち着け、あたしが興奮するところではないはずだ。

「仮に、あんたが言うとおりだとして、何で作者はこんな中途半端なところで作品を終わらせたんだ？ノンフィクションなら最後まで書けるはずでしょ。いや、書くべきだ」

「おそらく作者は事故でないことを知っていたのだろう。それに、事故と書いてしまったのは作者の目的が果たされない」

やはりそうか。あたしの仮説は補強された。

「つまりあんたは、あの二十年前の事故も、自殺だったって言いたいのね」

お姉さんの身体が若干はねた気がした。

「ああ。あの事故は被害者樋口美花の自作自演だったんだ」

あたしはため息をついた。こりやどという偶然だよ。お姉さんだって、たまたま興味を持った小説に自分が登場するなんて思わなかっただろう。それにしても作者は一体何者だよ。目的って何だ？あたしは成瀬を見る。

「解らないことがあるなら、もう一度この本を読んでみて、自分の推理を思い出せばいい。この本に全て書いてある」

「残念ながら書いてないよ。あたしが知りたいのは作者のことだから」

自分のことを自ら執筆した小説に書くやつはいないだろう。正規のルートで出版されたものならば、表紙や裏表紙の裏にちよつとした紹介が載っているが、これは載っていない。

「作者は名前しか書いていない。これはわざとそうしたんじゃないの？自分のことを知られないために。その名前だって手がかりにならないかもしれない」

火朽砂系だっけ？未だになんて読むのか解らない。

「確かに、作者は自分のことを書いていない。しかし、推測不可能かというところでもない。この真相に気付いてもらうために、足跡を残している」

成瀬は先ほど登場人物の名前を書いた紙を示す。

「何度も言うが、この小説は例の事件を基に書かれたノンフィクションだ。その理由として、登場人物の名前が事実に基づいた名前になっていて、それぞれ対応する人物がいる」

あたしは紙をじつと見た。確かに対応している。これで無関係だというのは、ちよつと無理があるというくらいに。全員にそれぞれ対応する人物がいる。と思ったが、あれ？これは……。そこであたしは成瀬が言いたい事に気づいた。

「これだけ事実に基づいた内容をしているにもかかわらず、一人だけ現実に存在しているのに、小説に登場していない人物がいる」

その人物は誰か。捜査は簡単だ。現実に存在している人物を一人ずつ小説の人物に当てはめればいい。勇人は違う。美花も違う。丈二、知恵、誠二、ひかり、全員違う。お姉さんも違うし、小春ちゃんも違う。豊口未来も違う。残るは一人しかない。

「小説では、ブレーブは一人息子で兄弟はいない。しかし、現実ではどうだ？ 樋口勇人に兄弟はいないだろうか」

「樋口才人……」

そうだ。樋口勇人には弟がいる。現樋口製菓の社長。なぜここまで忠実にしてきた登場人物の中で才人だけが小説に存在していないのか。ブレーブは一人息子であることを明記してまで、才人の存在を消したのか。この会話の流れからして答えは一つしかない。ここに来て火朽砂系の読み方が解った。

「答えは樋口勇人の実弟樋口才人がこの小説の作者だということだ」

これで作者の正体が解った。次の問題は、才人はなぜこの小説を書いたのかということ。

「確かこの小説は、客の忘れ物だったよね？」

あたしはお姉さんに尋ねる。返事はなかったが、あたしはそう聞いた。つまりその客が、樋口才人だったのだろう。

「樋口才人はこの店に來客し、そしてこの小説を置いていった。も

ちろんわざとだろう。なぜそんなことをしたのか、答えは一つだ」

客が忘れ物をしたら店側は、その客が取りに来たときのために、忘れ物を預かっておく。しかし、いつまで経っても取りに来なかったら、それはどうなるのだろうか。店側の対応としては中身を確認して、貴重品だったらおそらくまだしばらく取っておくかもしれないが、そうでなければ捨ててしまう。それが小説だったら、きっと読んでしまうだろう。そしてそれが面白ければのめりこんでしまい、最終的に事件の真相が気になってしまう。容易に想像できる展開だ。つまり、

「この小説はあなたに事件の真相を考えてもらうために書かれたんだ」

「だからなんだって言うの？」

今までずっとだんまりを決め込んでいたお姉さんが口を開いた。

「樋口才人がこの小説を書いて、それはあの事件のノンフィクションで。この小説を書いた理由は私に読ませたかったから？それで？あなたは何が言いたいのか？」

もしかしたらお姉さんは無意識的に成瀬の言いたいことが解ってしまったのかもしれない。そして、無意識的に拒否しているのかもしれない。

「あなたは小説の結末を聞いてどう思いましたか？このばらばらになった家族に対して、どんな感情を抱きましたか？」

「それがどうしたの？あなたに関係ないでしょ！」

やはりお姉さんは何かに気付いている。しかし、今まで絶対的に

拒否していたこと。そう簡単に受け入れられないみたいだ。少しパニック状態になってしまっている。一方成瀬はいつもどおりに無感情な無表情で、話を続ける。

「確かに関係ありませんでした。俺は例の三千円について、頼まれただけです。ではそっちのほうに話を移行しましょう」

成瀬は再び本を広げた。

「この小説の中には、樋口才人の存在のほかにもう一つ現実と相違している部分があります」

成瀬はパラパラとページを捲り、そして手を止める。

「場所はエピソード。事件の収まった後の話を書いてある部分です。その最後、育ったクロリスとブレーブの会話の部分ですが、ブレーブと共にクロリスも、リーラに贈り物を始めたと書いてあります」

あたしはその部分を昨日読んだ。クロリスは花を贈り物に選んだのだ。確か、カルセオラリアとかいう名前の花だ。確か花言葉は……。

「ブレーブは樋口勇人のことですから、毎月養育費が送られてきているので、事実とおりです。しかし、クロリスはどうでしょうか？ クロリスは、あなたの腹違いの妹樋口小春のことです。樋口小春から毎月贈り物がありますか？」

「あるわけないでしょ。彼女は中学二年生。まだ子供なのよ。私のことを知っているかどうかとも怪しいのに、贈り物なんてするわけないでしょ」

「そうかもしれませんが、この小説にはそのフレーズが出てきます。知らないおじさんに教えてもらったとも書いてあります」

「小説が何なのよ！事実私がもらっていないって言っているでしょ！」

「いえ、あなたはもらっています」

「もらっていないわよ！父さんたちに仕送りをもらっている以外では樋口勇人からしか……」

と言いかけて、お姉さんは口を開いたまま言葉を止め、ぐっと唇をかんだ。お姉さんは何か思い当たったようだ。

「そうです。例の送り主不明の三千円が樋口小春からの贈り物です」

まさしく子供のお小遣いだった。最初に送られてきたのは去年の四月から。きっと中学に上がってお小遣いが増えたのだろう、そこからわずかながら送るようにしたのではないか。そして、今年の四月に進級してお小遣いの金額も上がったら、お姉さんに送る金額も二千円から三千円にあげた。

「だから！さつきから何が言いたいの？小説に書いてあることが事実だったからって何？事実っぽいだけで事実だなんてまだ解らないわよね？送り主も小春ちゃんじゃないかもしれないし、作者も樋口才人じゃないかもしれない。お母さんも自殺じゃないかもしれない。そもそもこの小説がフィクションだったら全部無関係だわ」

「そうですね。確かに証拠はありません。ですが、あなたが樋口勇人に会いに行けば、全て解ります」

「！」

まさか、こいつ。この話を聞いたときからずっと考えていたのではないだろうか。おい成瀬、そりゃあたしの役目だろ。あんたはや

らなくていいって言ったじゃないか。

「俺の推測が外れたならば、樋口勇人がどんな気持ちで会いたいたいと言っているのか皆目見当もつきません。しかし、俺の推測があつたつていたなら、おそらく樋口勇人は今でもあなたと、あなたの実母美花を愛していると思います」

全ては想像。外れれば妄想と言われても仕方がないことだけど、もしそれが真実ならば。

「樋口才人はどんな気持ちでこの小説を書いたのでしょうか。おそらく才人が真実を知ったのは十年以上前のことでしょう。兄を問い詰めたのか、それとも兄のほうから話を持ちかけてきたのか。俺には解りませんが、それを聞いた才人はきっと兄とその家族の悲しい別れに涙したのではないのでしょうか」

あたしはあの小説の中で、遺書の内容を考えた。その遺書には誰にも言うな、とか、アヴニールと結婚して幸せになつてくれ、とか書いてあると想像した。事実の事件でも遺書があり、似たような内容が書いてあつたならば、読んだ人間はどう思うだろうか。勇人は間違いなく泣いただろう。しかし、勇人以外でも、二人のことを知っている者ならば、その悲しい別れに涙するのではないか。

「誰にも言わずに最近まで過ごした。もしかしたら忘れていたかもしれない。しかし、あることがきっかけで、その悲しさがぶり返した。そして、やはりこのままでは駄目だと思い、この小説を書いた。そのあることとは何でしょうか」

お姉さんは答えない。代わりにあたしが口を開く。

「初版発行は去年の今頃。ってことはもうすでに小春ちゃんが書留を送っているね」

「そう。才人は風の噂で、あるいは兄から、もしくは小春本人からそのことを聞いたのだろう。いつまでも娘の幸せを思う兄と、見たこともない姉に慰謝料を送るその娘、そしてすれ違いによって実父を恨むもう一人の娘。才人はこの悲しい関係を清算したいと考えたのではないか」

「黙って！」

お姉さんは成瀬の声を遮って叫んだ。その目からは涙がこぼれている。

「樋口勇人は私のお母さんを裏切ったのよ！父さんから最愛の姉を奪ったのよ！私の恨むべき相手なのよ！弟とか娘とか使って私を騙そうとしても無駄だわ！今更許すことなんかできないのよ！」

お姉さんは声を荒らげる。しかし、あたしの心はどんどん沈んでいった。その声は、助けを求める子供のようにしか聞こえなかった。

「何が言いたいなのよ！全ては私の勘違いだって言いたいのか？だから恨むのはお門違いだって言いたいのか？それで、私は何をすればいいのよ！」

「何をするか選択するのはあなたです。ただ俺の話を聞いて何か感じたのなら、行動を起こすべきでしょう。しかし何度も言いますが、全く証拠はありません。俺の推測がただの妄想だったら、俺のことも恨んでいただいて構いません。しかし、」

信じる根拠はこの小説だけ。しかも全ては成瀬の解釈。もちろん間違っている可能性も少なからずあるだろう。信じて、それが間違っていたら最悪。しかし本当だったら？

「しかし、本当だったらどうでしょうか。今は違くともあなたと樋口勇人は親子です。腹違いとはいえ樋口小春とは血を分けた姉妹です。この機会を逃すと、もしかしたらもう一生会えないかもしれません。考えても見て下さい。何でこのタイミングで会いたいと言ってきたのでしょうか？まだ夏休みまで時間があります。樋口勇人だって一応取締役です、今は忙しい時期でしょう。なぜあと一ヶ月待てなかったのか」

「私の母親はもういないの！父親も妹もいないのよ！」

「そのとおりです。しかし、亡くしたものが何なのか解っているなら探すことも、もう一度手に入れることも可能です」

お姉さんはきつと樋口勇人のことを嫌いではないのだ。しかし、小林誠二・ひかり夫妻に育ててもらった手前、好きとも言えない。立場的に板ばさみになり耐えやすいほうを選んでしまったのだ。好きだと認めてしまつて、樋口勇人を信じると裏切られたときつらい思いをする。しかし最初から信じなければ、そんな思いはしなくていい。裏切られたときのことを考えて、期待や信頼を破棄してしまふことは誰にでもあることだ。お姉さんはその気持ちに気付いてしまったんだ。もう忘れられない。しかし、まだ踏みとどまることができる。今お姉さんは岐路に立たされてしまったのだ。

「少し話すぎましたね。今日は帰ります。さっきも言いましたが、決めるのはあなたです。俺はあなたが選んだ答えに文句を言うつもりはありません。指図するつもりもありません。自分が思う最良の選択をして下さい」

そう言つと、成瀬はおもむろに立ち上がり、店から出て行つてしまった。あいつは本当に自由なやつだな。泣いているお姉さんを一人にできるのか？あたしにはできないね。たとえお姉さんが出て行

って欲しいと思っ
ていても、だ。

「大丈夫？」

しばらくすると、お姉さんは涙を止めた。

「ごめんね。迷惑かけたわ」

どうやら興奮していた気持ちも収まったようだ。しかし、心の揺らぎはまだ収まってい
ないだろう。これからどうするのだろうか。

「遅くまで付き合わせちゃったね。今日はもう帰っていいよ」

「え？でも、」

「今日は帰って」

むう。そう真剣に言われてしまうと、今日は歯向かえないな。うーん、仕方ないか。

「何かあったらまた呼んでね。あたし、力になるから」

あたしが力強くそう言う
と、

「じゃあお願いしちゃおうかな？」

いきなり来るとは思わなかつたね。まあいい。何でもどーんと来
いだ！

「何？何でも言って？」

「じゃあ、明日——くれない？」

「は？」

あたしは聞き間違えたかと思った。

「それ本気？」

「本気」

「あたしでいいの？」

「うん。ゆかりちゃんならきつとできるよ」

そう言われても……。あたし、大概のことはできると自負しているけど、やったことないことに関しては自信持てないなあ。

「何でもしてくれるんでしょ？」

うっ。まあそう言ったけど。まあ仕方ない。いつちよやりますか！

「解ったよ」

「ありがと。お願いね」

そこであたしたちは別れた。外はもうずいぶん暗くなっていた。

PHASE・12（前書き）

翌日の話。次回最終話。

PHASE・12

そして翌日。あたしはお姉さんのお願いどおり、またしてもここに来ていた。

「この辺はだいたいいいから。今日もお客さんあまり来ないと思うし。ただ、常連さんには気をつけてね。結構味にうるさいから」「気をつけてってどうすればいいのよ」

ただし、今日はいつもとは違うぞ。ただいるだけではないのだ。なぜならあたしは今、カウンターの内側にいる。なぜって？お姉さんに頼まれたからに決まっている。

「まあ適当に謝ってくればいいよ」

それで店に来なくなっちゃったらどうするんだ。お姉さんの口調が嫌に軽くて逆にあたしは緊張している。うーむ。サイフォンを扱うのは当然初めてだ。

ちなみにここにいるのはあたしだけではない。もう一人、スペシヤルゲストがいる。

「成瀬君は料理できるのよね？今日だけ、ランチやってますって看板出しちゃったから、適当に注文受けてね」

そう、成瀬だ。なぜこんなことになっているかというと、なんと今日はあたしと成瀬がこの店を任されるからだ。ま、お姉さんははずせない用事があるのだ、仕方ないね。

「何で俺がこんなことを・・・」

「ごちゃごちゃ言っな。ここまで来たんだ、腹を括れ。あんた、男
だろ。」

「文句言っならお姉さんに言って。それに、今日のことは無関係じ
やないでしょ」

「俺は責任取らないと言っただはずだ」

「だから、文句はお姉さんに言って」

全く女々しい野郎だ。正直あんたの愚痴を聞いている暇ないんだ
よ。あたしはサイフォンの相手で忙しいんだから。てか、今日教え
てもらって、うまく淹れられるのか？あたしは無理だと思う。だか
ら、客から見えないところにはコーヒーマーカーが置いてある。こ
れは内緒の話である。

そうして、あたしにとって初めてのアルバイトは始まった。正直
久しぶりに緊張したね。最初は四苦八苦したが、慣れたらずいぶん
楽しめた。本格的にここで働こうかと思っただよ。しかし、今日に限
って忙しかった。皆さん、気軽にランチできる場所を探しているの
かな。などと思うほど、成瀬の料理は好評だった。もしかしたら成
瀬はスカウトされるかもしれない。

しかし、お姉さんはずっとしかめっ面で、何か考え事をしている
様子だった。それもそうだろう。お姉さんにとって、今日は特別な
日だ。一世一代と言っても過言ではないだろう。もし、今日あたし
がオーケー出さなかったらお姉さんは店を開けなかったかもしれない。
お姉さんは緊張していた。

そして、ついにそのときが来た。

店に新規の客が来た。その客は親子連れ。父親と娘だ。その二人はカウンターの前まで来て、注文するより先に、

「樋口勇人です」

「樋口小春です」

と名乗った。つまるところ、お姉さんは会うことにしたのだ。そのためにあたしと成瀬はここに呼ばれたというわけだ。

「お待ちしてました」

親子のそれとはかけ離れた会話だ。しかししょうがないだろう。二人は今まで親子ではなかったのだから。その曖昧な関係を変えるために今日会ったのだ。さて、その決意はどちらに傾くだろうか。

お姉さんは二人を一番奥のテーブルへ案内する。視覚的にも聴覚的にもあたしたちは介入できない位置だ。これから語られる話はどんな話になるのだろうか。願わくば、誰にとっても幸せな話でありますように。

それからが長かった。客が減ったら『コーヒーのおかわりはいかがですか?』とか言って乱入しようかと思っていたのに、一向に客は減らなかった。そして、ようやく客足が途絶えた午後六時ごろ。三人はカウンターに姿を現した。

「今日はわざわざありがとうございますありがとうございました」

相変わらず硬い挨拶だ。ま、しょうがないのかな。家族とは言え、さすがにそう簡単に打ち解けることはできないだろう。今まで心を許していなかったのだからなおさらだ。理解していても、あたしは少し寂しかった。しかし、

「小春ちゃん、今いくつだっけ？」

「十三歳です」

「そっか。今までお年玉上げなくてごめんね」

「いえ。とんでもないです」

「だから、今日まとめてあげる」

「え？」

お姉さんは金庫から封筒を取り出した。あ、その封筒って。

「はい。お年玉」

小春ちゃんはずいぶん分厚いその封筒を受け取ると、その中身を取り出した。封筒の中からは、

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

大量の千円札が出てきた。もちろん何枚あるか、数えることはできないが、あたしはそこに何枚の千円札があるか想像できた。おそらく、三十三枚。三万三千円のお年玉だ。中学二年生にしてはちょっと多いかな。でも、別に問題ないでしょ。だって、元はと言えば彼女のお金なのだから。

「また会おうね」

「はい！」

お姉さんは笑顔だった。どうやら完全に今までと変わりなしではなかったようだ。この変化が悪い変化であるはずがない。

お姉さんは、小春ちゃんから視線を移動させ、樋口勇人を見た。

「いずれまた会いましょう」

「ああ」

「今度は母の話を聞かせて下さい」

この言葉に、樋口勇人は目を見開いた。だが、それも一瞬のことだった。

「ああ。もちろんだ」

樋口勇人は大きく頷いた。その目に涙がにじんでいるように見えたが、きつと気のせいだろう。こんな嬉しい瞬間に涙を流すはずがない。だって涙は悲しいときと悔しいときに流すものだ。

そして二人は帰って行った。その後姿を見送るお姉さんの顔は、どこかすっきりしているように見えた。

「よかったね」

あたしは思わず声をかけていた。

「うん？何が？」

そう来たか。役者だね、お姉さんも。

「何でもないよ。それで、お金はどうするの？」

「いらないうって言ったんだけどね。お母さんとの約束だから、使ってくれて言われちゃって。だから少しずつ使うことにするよ」

「そっか。で、小春ちゃんのほうは？」

「あつちはちゃんと断っておいたわ。さすがに妹にお金をもらうわけには行かないからね」

なるほど。妹ですか。

「何変な顔しているのよ」

変な顔とか言わないでよ。かわいく微笑んだんだよ！

「それで、次はいつ会うの？」

あたしの質問にお姉さんは苦笑。うん？あたし、何か変なこと言った？

「しばらく海外赴任するみたい。何でも海外展開を考えているみたいで、社長自ら出かけるみたいよ。単身赴任みたいけど」

「それはいつまで？」

「さあ。でも一年や二年の話じゃないみたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

成瀬の言ったとおりだな。何でもこのタイミングで再び面会の話を持ちかけてきたのか。その答えがこれってわけだ。せっかくまた会えたのに、しばらく疎遠になってしまうのか。

でもお姉さんは前を向いた。これまで目を背けていた問題と再び

向かい合ったのだ。これが変化のきっかけにならない訳がない。

「じゃあこれからは小春ちゃんと二人で会えるんだ！」

あたしは明るく言った。今日はいいい日はず。悲しんで暗くなるのはおかしいでしょ？

「そうだね。そう考えると、悪くないかも」

お姉さんも笑ってくれた。いつもとは少し違う、子供っぽい無邪気な笑顔で。

「とにかくこの問題は全部片付いたわ。ありがと。ゆかりちゃんには感謝しているわ」

「どうしたしまして」

一応こう言わせてもらったけど、あたし役に立てたかな？それよりもっと感謝しなきゃいけない相手が他にいるでしょ。

「成瀬君もありがと。全部あなたの言うとおりだったわ。さすが、ゆかりちゃんの見込んだ人ね」

なーんかおかしいなと言ってないか？

「俺は何もしていませんよ。今回のことでお礼を言うなら、この小説の作者に言っして下さい」

この男は一体どこまで……。

「そ、そうだね……」

ほら見る。お姉さんも引いてしまっているじゃないか。だいたいあんたは自分のしたことを軽んじてみている節がある！少し考えれば解ることじゃないか。確かに、あの小説がなければ事件の真相にもたどり着けなかったし、お姉さんたちに進展はなかったよ。でも、あの小説があっただけではどうしようもなかったのは事実だろ。あんたが小説と事件の繋がりに気付いて、お姉さんに教えてあげたから、今日三人は会えたんでしょ。こいつ、本当に解っていないのか？正直信じられないレベルまでできているぞ。謙遜しているだけじゃないのか？謙遜にしても度を越えているぞ。

しかし、これ以上言っても仕方ないことも、あたしは知っている。前回のことで学んでいるよ。こいつはこういうやつなんだ。何度言っただって変わらないと思うよ。お姉さんも、何となく理解しているようで、もう繰り返しお礼を言ったりしなかった。

「さて。じゃあお店閉めちゃうか？」

「えー！」

今日もですか？最近いつもじゃん。平気なのか？この店は。

「今日は二人ともありがとね。慣れないことやって疲れたでしょ？お礼に私がご馳走しちゃうから」

いやー、それはありがたいんですけど、何というか、とにかく店は平気なのかと問いたいね。成瀬もどこか困ったようにしている。ため息を吐く仕草がいつもと違う。

ま、いいか。あたしにとっても今日はいい日だ。お姉さんも上機嫌だし、断る理由はほとんどない。あたしは奮って参加することに

PHASE・13（前書き）

これで最後です。いつもどおり、作品についてのお話を別に造りたいと思いますので、読み終わった方はぜひそちらも読んでみてください。
ではどうぞ。

あれから一週間が経過した土曜日のことである。今日はお姉さんの店には行かない。あたしに用事があるってこともそうだけど、今日お姉さんは樋口才人に会いに行っているのだ。例の事件のことも聞くだろうけど、実際どうか解らない。お姉さんはあの小説をいたく気に入っていたからなあ。もしかしたら、あの話しかないかもな。ま、それもありだよな。

あたしのほうはというと、現在車の中にいる。言っておくが、リムジンではないぞ。あんなでかくて目立つ車、乗りたくないね。何かしたら、すぐに見つかってしまうじゃないか。何をするのか、っていう質問はナンセンスだよ。誰に見つかるのか、っていう質問もなしだ。

などと話しているうちに、目的地に到着する。あたしは使用人を引き連れて、マンションの中に入った。そして、テンキーを叩き、インターフォンを鳴らす。

「はい」

「あたしだけど。開けてくれない？」

「は？何の用だ？」

「約束果たしに来た」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言の返事が来て、オートロックの自動ドアが開いた。あたしはすかさず中に入った。あんたも早く来なさいよ。荷物が重い？知らないよ。あんた、あたしの使用人でしょ？荷物持ちくらいしつかりこなしなさい。

エレベーターで上がり、目的地に到着する。そして、またインターフォンを鳴らす。

「ああ、いらつしゃい。で何の用だ？こんな時間に」

現在午後五時すぎだ。こんな時間ってこともないだろう。

「あんたにプレゼントだよ」

あたしは使用人に合図。何、キヨロキヨロしてんのよ。早く来なさい。そしてふたを開けて、中身を見せなさい。

「これは、真鯛」

「そうよ。約束したでしょ」

そうだ。あたしの用事とは約束したマゴチを届けること。つまり、今は成瀬の家の前に来ているのだ。

「そいつはわざわざご苦労だったな」

と言いながら、成瀬は使用人を見た。何だよ。それじゃあ使用人に言っているみたいだぞ。

「はい。これで約束は果たしたわ。受け取りなさい」

使用人は成瀬に手渡した。ふー、重かった、みたいなリアクションをするな！みつともないだろ！すると成瀬は、

「礼を言いたいのだが・・・」

と語尾を濁らせた。今度は何だ？

「それじゃ不満なの？ご注文のとりの品を持ってきたつもりだけ
ど」

と言つてもあたしは指示しただけだけど。

「いや、物に問題はない。確かにかなり新鮮だ。それにこりや質も
よさそうだ。ただ、」

何だよ。はつきり言えよ。

「何が問題なのよ」

「でかすぎる」

あー……。なるほどね。確かにでかいわ、この魚。これじゃ冷
凍庫に入らないだろうな。冷蔵庫でも無理だ。それは考えてなかつ
たわ。この部屋広いけど、一人暮らしだもんね。さすがにそこま
ででかい冷蔵庫は必要ないもんね。

「よし。今食つてしまおう」

「は？」

そう来るとは思わなかった。おいおい、さすがに短絡的過ぎない
か？確かに保存する必要はないけど。

「あんたも手伝つてくれ」

「あたしも食べるの？」

「他に誰がいる？」

あたしと成瀬はゆっくり使用人のほうを見た。ものすごい勢いで首を横に振っている。さすがにそうだよな。頷いたらどうしてやるうかと思ったよ。あ、あんた、もう帰っていいよ。今日も夕飯いらないって言っというて。

ということで、今回は協力してやることにした。保存のことを考えなかったあたしのせいでもあるし、マゴチってやつがどんな味か知りたかったし。

「解った。協力するよ。でも二人で食べられるかな？」

目算だが、おそらく一メートルくらいはありそうだな。重さは二十キロくらい？重さのことは解らない。

「食べられないこともないが、せっかくだし、連中を呼んでやろう。たまには俺のほうから呼んでやってもバチは当たるまい」

連中とは？何てことは聞かないよ。誰だか解っている。TCCの人だろう。別に構わないよ、あたしは。そろそろあんたと二人きりも飽きてきたところだ。ただ、無関係の人を巻き込むのはちよつといただけないような気がしないでもない。別にそんなことどうでもいいけどね。あんたが誰を呼ばうとあたしは興味ないよ。本当に。

と言うことで、さっそく成瀬は岩崎さんに連絡を取った。結果は来てくれるとのこと。他の二人には彼女から連絡をしてくれるらしい。あたしたちは料理の準備にかかった。

「ところであんた、魚捌けんの？」

「当然だろ。真鯛を捌いたことはないがな」

大丈夫だろうか。と思ったが、何ら心配なかった。うーむ、さすがだ。あたしが女だからと言って、対抗しようとも思わなくらいすごい腕だ。

「一応お礼言つとくよ。ありがとう。今回も世話になったよ」

成瀬は軽快に背びれ・腹びれを落とし、うろこを落としていく。そして、かまから包丁を入れ、頭と身を切り離した。

「礼ならすでもらっている。こいつが礼なんだろう？」

成瀬は魚を指して言う。こいつは前回の分と、今回の依頼の分だ。あたしが言っているのは別のことだ。

「お姉さんに会うこと薦めてくれたことだよ。あんたのおかげで、お姉さんは嬉しそうだった」

「俺は薦めてないぞ。本当のことを言っただけだ」

こいつは本当に素直に受け取ってくれないな。あたしが礼を言うなんて珍しいことなんだぞ。マゴチと比べ物にならないくらいな。

「あたしがあなたに依頼したのは小春ちゃんのことだけ。あれは依頼の外だよ。だから、他にお礼がしたい」

「これで十分だよ」

「あたしが納得いかないんだ」

料理の手を止めない成瀬に、あたしは無理矢理こちらを向かせた。

「お礼、させる」

お礼なのに命令形っておかしくないか？だが、こいつ相手じゃ仕方ない。あたしは真面目に言っているんだ。借りを作るのはあたしの信条じゃない。

成瀬は表情を変えず、じっとあたしを見返していたが、やがて頬を緩め、ふっと笑った。

「あんたはつくづく変わっているな。変なやつだ」

「あんたに言われたくないよ。それで、答えは？」

成瀬はやれやれ、といった感じでため息をついた。

「じゃあ一つお願いしよう」

「よし。何でも言え」

「俺たちを助けてくれ」

「・・・・・・は？」

何でまた、そんなことをお願いするんだ？てか意味が解らない。
あんたは今ピンチなのか？

「どういうこと？」

「俺たちのところには結構面倒な依頼が来るんだ。国家権力でも使わないといけないようなことがしばしばあってな。その辺り、とても苦労するんだ。そういうときには権力ってやつが必要なんだよ」

「あたしの名前が欲しいってわけか」

「そういうことだ」

この野郎、いけしゃあしゃあと言い切りやがった。あたしが日向

の権力を使いたくないって知ってて言っているのか？

「もちろん毎回必要ってわけじゃない。俺たちがピンチで崖っぷちのときにだけ、助けられればいい。戦隊物のヒーローのようにな」

「あたしはＴＣＣ辞めているんだけど」

「別に入部する必要はない。ただ頼ったときに助けられるだけでいい」

簡単に言ってくれるな。あんたが何を求めているか知らないけど、あたしにできることって言うのは結構少ないんだぞ。

「あんたが求める仕事ができないかもしれないけど、あたしでいいの？」

「ずいぶん謙虚な発言だな。あんた、スーパーお嬢様じゃなかったのか？」

間違えるな。スーパー美少女お嬢様だ。

「まあ適当に考えといてくれ。期限は設けないから」

そう言うと、成瀬は再び料理に戻った。こいつは何を考えているんだろうか。理解できないな。ただ、あたしの中の答えはすでに決まっていた。今回のことと引き換えに、助けてくれて？ 変なこと言いやがる。そんなこと当たり前じゃないか。あんたたちがあたしに何をしてくれたかと思っているんだ。あたしはまだまだ恩を返せていないつもりだよ。また借りちゃったけど、今度こそあたしが返す番だ。ＴＣＣはあたしの恩人だ。少なくとも成瀬と岩崎さんには恩返しする義務があると、あたしは思っている。あんたたちが助けてくれて言うなら、あたしは何を犠牲にしても助けるよ。権力だって何だって使ってあげる。日向に頼りたくないってプライドはあ

るけど、恩返ししないなんて選択肢はもっとプライドに触る。

「あんたは勘違いしているよ」

「は？」

「あたしは情に厚い人間なんだ。助けるに決まってるでしょ」

「ほう。それはそれは」

冗談に聞こえたか？あたしは本気で言ったんだぞ。ただもう言わない。こんな恥ずかしいこと、二度も言えるか。今のが最後だ。

「とりあえず、今助けるよ。あたしは何をすればいいの？」

しばらくすると、TCCの三人がやってきた。

「こんばんは！」

成瀬はちょうどマゴチを油に投入していて手が離せないの、あたしが迎えに行く。うーむ、マゴチってやつは実にいろいろな調理法があるな。成瀬はすでに刺身やらてんぷらやらお吸い物やらを作り終わっている。頭を丸ごと使った料理はすごい迫力だぞ。

「いらつしゃい。早かったね」

「んな！」

おや？岩崎さんがとても驚いている。あたしは変なこと言うただろっか？

「あなたは日向ゆかりさんですよ？何でここにいるんですか？」

岩崎さんの後ろからひょいと顔を出した小さい女の子が言った。察するに噂の新人部員だろうけど、うーむ、制服脱ぐとずいぶん幼く、いや若く見えるな。おっと、そんなことどうでもいいわ！それより現状だ。なるほど。あたしがいること言っただけじゃなかったな。あの野郎、こういうことに頭が回らないんだから。ああ、これで話がこじれること間違いなし。と思っていると、

「俺が呼んだんだ。今日の食材はこいつが持ってきてくれたんだ」
「そ、それは大変よろしいのですが、何で成瀬さんが日向さんを招待しているんですか？そ、それも、私たちより先に・・・」

こ、こわい！早速怒ってないか？どうするんだよ、成瀬！あたしはまだ死にたくないぞ！

「そんなことどうでもいいだろ。とにかく上げろ。俺たちは今調理中なんだ。配膳くらいは手伝え」

成瀬はどうでもよさそうにキッチンへと戻っていつてしまった。おいこら、まだ話は終わっていないぞ。あたしだけにするな。

「お邪魔しまーす」

「お邪魔します」

岩崎さんを除いた二人は部屋の中へ入っていった。

「岩崎さんも中へ・・・」

「日向さん、私に何か隠していませんか？最近成瀬さんと何かあったんですか？」

岩崎さんの言う、何か、はないが、何もなかったかと言うと嘘になる。どうしたらいいんだ。あたしはこの人に嘘はつきたくない！

「岩崎さん！」

「何ですか？」

「あたしは、成瀬と岩崎さんの味方だから」

突然あたしは何を言っているんだろうか。しかし、岩崎さんは、

「ほ、本当ですか？嘘じゃないですよ？信じていいんですよ？」

なぜか食いついてくれた。なるほど、理解できた。

「本当だよ。だから何かあったら何でも言っ！相談に乗るから！」
「ありがとうございます！お世話になります！」

そう言っと思いきり頭を下げると、岩崎さんは部屋の中へ入っ
いった。ふう。とりあえず、これ以上の追求は避けられそうだ。間
違いなく、今の会話であたしと岩崎さんが考えていることは食い違
っていたと思う。でも、あたしの言葉は本心だ。あたしはいつでも
二人の力になるよ。これから先ずつと。

あとがき（前書き）

これはただのあとがきです。興味ない方は回れ右することをお勧めします。

あとがき

いつもどおり、あとがきを別に用意させていただきました。ストーリー上関係ない話なので、別に読まなくても影響はありません。作者としてこの作品についてのお話をするだけなので、興味ない方は回れ右をしてください。

では、さっそくこの作品について余談をさせていただきます。

この作品での語り部は、成瀬ではなくお嬢こと日向ゆかりさんでした。こうなる経緯は簡単に言って、読者の皆さんからオファーがあったからなのですが、お嬢を語り部にしたのは私の独断です。この作品の二作目を読んでいた方にはご理解いただけたと思うのですが、お嬢は語り部として登場しているのです。なので、新たに登場させるならば語り部として出すのが妥当だろう、と勝手に考えていました。成瀬目線が好きだという方はがっかりしたかもしれません。大変失礼しました。

作者としての意見を言わせていただきますと、とても楽しかったです。成瀬はとても理屈っぽくて、かなりのめんどくさがり屋です。地の文がかなり後ろ向きで、主人公向きではないようなセリフを平気で言うやつなので、グダグダと長くなってしまふことが多かったのですが、その点、お嬢はさっぱりしていていい意味で男らしく、書いていてとてもすがすがしい気持ちになれました。時にはしっかりしたことを言い、時にはおどけて面白いことを言う。セリフや地の文にバリエーションがあり、書いていても面白かったです。

成瀬目線の作品とまったく違った雰囲気を楽しめたと思うのですが、いかがだったでしょうか。成瀬は、その思いを心のうちに秘めてしまうことが多いため、他人から見ると、かなり変わったやつに見えましたね。いつも以上に何を考えているのか、わからないやつでした。意外と、他人を思いやることができるのですが、それがわかりやすく表に出ないために、誤解されやすいやつです。お嬢目線にして、ご理解いただけたと思います。

なぜか二作続けて短編の番外編みたいな作品になってしまいました。次回からは通常どおり、成瀬目線の推理物に戻したいと思います。ようやく書き始めましたので、一カ月後くらいには連載を始められると思います。

最後になりましたが、私は日向ゆかりが結構好きです。しばらく登場しないと思うと、結構さびしいです。ですが、また見せ場を作りたいと考えているので、お嬢ファンの皆様、未永く待っていていただけると幸いです。

引き続き、感想・評価を待っています。たまには過去の作品も見てください。よろしくお願いいたします。

では、また会える日を待っています。

城ノ内ジョウ

あとがき（後書き）

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。次回作とともに、過去の作品もよろしく願っています。
またお会いできることを楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7986g/>

偶然という名の奇跡6～社長令嬢と推理小説～

2010年10月9日07時21分発行